福岡県グローバル青年の翼

グローバル&ローカル・リーダーシップ・プログラム

2016 報告書

“Think Globally, Act Locally”

INDEX

page	
2	知事あいさつ
3	団長あいさつ
4	事業概要
5	事務局・団員名簿
6	**第１次研修**
7	**第２次研修（フィールドワーク）**
10	**第３次研修**
11	海外研修 日程表
12	**第４次研修（海外研修）**
26	**第５次研修**
27	副知事表敬
28	**第６次研修（事後フィールドワーク）**
31	団員レポート
43	Snapshots with Message
50	事務局から一言
51	募集要項

知事あいさつ

国際的な視野を持ち、地域で活躍する人財の育成を目指して

福岡県知事
小川　洋

少子高齢化やグローバル化の進展、地方創生の機運の高まりなど、われわれの社会は大きく変化しています。

このような中、次代を担う若者には、広く世界に目を向け、チャレンジ精神旺盛な高い志を持ち、社会の発展に貢献することが期待されています。これからの福岡県の発展を考えるとき、異文化を理解し、海外の人々とも積極的に交流できる、グローバルな視野を持った若者の育成が重要です。

県ではこれまで、躍動するアジアの現状を肌で感じ、国際的な視野を持った青年リーダーを育成する「福岡県青年の翼」を実施してきました。今年度からは研修内容をさらに充実させて、新たに「福岡県グローバル青年の翼」として実施しています。

22人の若者たちが、ミャンマーのバガンとパコック、ヤンゴン、そしてマレーシアのクアラルンプールを訪問し、現地の青年たちや海外進出している県内企業の皆さん、社会貢献活動に取り組む国際NGOの皆さんと意見交換するとともに、「人材育成・教育」「観光・インバウンド」「食・フードビジネス」など、自分たちが設定したテーマで自主研究活動に取り組みました。

また、海外研修の前後に、県内企業による国際貢献や県内NPOによるソーシャルビジネスなどについても学んだほか、団員自らが企画したフィールドワークにも取り組みました。

参加された団員の皆さんにとっては、貴重な体験であり、かけがえのない財産になったことと思います。この「福岡県グローバル青年の翼」で学び、体験したことを糧に、“Think globally,act locally”国際的な視野を持ち、職場や団体など、地域でより一層活躍されますことを心から期待しています。

最後に、本事業の実施に当たり、ご尽力いただいた福岡県グローバル青年の翼実行委員会をはじめとする関係の皆さまに心から感謝申し上げます。

団長あいさつ

現地の青年たちの情熱を忘れず、それぞれの立場での活躍を期待します

団長　私学振興・青少年育成局長
関　好孝

平成10年度から昨年度まで18回に渡って実施した「福岡県青年の翼（グローバル・ウイング）」事業を、今年度からは研修内容をより充実させて「福岡県グローバル青年の翼」として新たに実施しました。9月上旬の第1次研修から始まり、自主的なテーマを持って挑んだ第2次研修、渡航直前の第3次研修を経て、11月6日から13日までの7泊8日の日程で、ミャンマーとマレーシアの2か国を訪問しました。

昨年度に引き続き、ミャンマーでは公益財団法人オイスカのパコック研修センターを訪問しました。約20年にも渡る日本の技術協力によって痩せた大地が緑豊かな農地に変わりつつある現実を体感するとともに、ミャンマー国内各地から集まり、厳しい共同生活をしながら、祖国の未来のために切磋琢磨する青年たちと交流を深め、団員の皆さんは大きな刺激を受けたことと思います。そしてヤンゴン郊外にある「福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑」での献花を通じて、団員全員が平和の尊さを改めて実感することができました。

マレーシアの首都クアラルンプールでは、関係各位のご協力を仰ぎつつ、多様な人種がともに学ぶ華人系小学校の授業を見学したり、世界中から観光客を呼び込もうとするマレーシアの政策についてレクチャーを受けたり、国家レベルの都市計画を司る政府機関から総合的な交通整備プロジェクトのレクチャーを受けるなど、非常に高いレベルの視察を実施することができました。

事前の国内研修で、福岡県を拠点に世界で活躍する方々からの専門性の高い講義で十分なインプットを行ったからこそ、海外研修で学ぶことが明確になり、より一層得るものが大きくなったのではないでしょうか。

最後に、半年にも及ぶ厳しい研修を乗り越えたことは、皆さんにとって大きな自信になるとともに、一緒に手を取り合って頑張った仲間との絆は、これからの人生にとってかけがえのない財産になることと思います。ミャンマーのオイスカ研修センターで出会った青年たちの純粋な情熱を忘れることなく、それぞれが仕事や学業に全力で取り組んでいただきたいと思います。近い将来、国際的な視野を身に付けて、皆さんがぞれぞれの立場で活躍されることを心より期待しています。

福岡県グローバル青年の翼（2016）　事業概要

1　趣旨・目的

県内青年に、世界（アジア）を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

2　概　　要

(1) 募集人員　24名（団長、副団長、団員22名）

(2) 研修内容

① 第1次研修（宿泊）
9月3日（土）～4日（日）
郷土の歴史・県内企業の海外展開・国際協力活動・県の施策等についての講義等

② 第2次研修（フィールドワーク）
①と③の間の任意の日
海外訪問先に関連する県内企業・団体等の視察

③ 第3次研修（宿泊）
10月15日（土）～16日（日）
訪問国及び訪問先に関する講義・海外視察先選定・英語スピーチ指導等

④ 第4次研修（海外研修）
11月6日（日）～13日（日）
現地企業や産業インフラ、NPO法人、多民族融和（ムスリム政策）・文化施設の視察・体験、現地で活躍する日本人などとの交流等

⑤ 第5次研修（宿泊）
12月3日（土）～4日（日）
海外研修レビュー・NPO法人活動講義・事後フィールドワーク企画等

⑥ 第6次研修（事後フィールドワーク）
⑤と⑦の間の任意の日
海外研修を受けての県内実践活動

⑦ 報告会
3月26日（日）「ふくおか若者魁大会」
研修成果報告会

(3) 海外研修　**日　時**　平成28年11月6日（日）～13日（日）　7泊8日

訪問先　マレーシア（クアラルンプール）、ミャンマー（ヤンゴン、バガン、パコック）

(4) 参加資格　平成28年4月1日現在で、満18歳以上30歳以下の県内居住者
（企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的視野を身につけ企業・団体等の中核となって活躍する青年リーダーを目指す者）

(5) 実施主体　**福岡県グローバル青年の翼実行委員会**
（福岡県、福岡県青少年団体連絡協議会、（公社）福岡県青少年育成県民会議、（公財）福岡県国際交流センター、（公財）オイスカ西日本研修センター、NPO法人ふくおかNPOセンター、青年の会、JETRO（日本貿易振興機構福岡貿易情報センター））

事務局・団員名簿

氏名	性別	所属・職業		役職
関（せき）　好孝（よしたか）	男	福岡県私学振興・青少年育成局	局長	団長
渡辺（わたなべ）　伸也（しんや）	男	福岡県私学振興・青少年育成局	青少年育成課　事務主査	副団長

氏名	性別	所属・職業		生活班		テーマ別
井上（いのうえ）　愛（めぐみ）	女	宗像市役所	教育子ども部　子ども家庭課	1班	リーダー	観光・インバウンド
井口（いのくち）　由貴（ゆき）	女	九州大学	21世紀プログラム　1年		記録・報告書	人材育成・教育
井本（いもと）　大輔（だいすけ）	男	株式会社正興電機製作所	環境システム営業部公共営業第1グループ		サブリーダー	観光・インバウンド
窪田（くぼた）まりか	女	福岡女学院大学	国際キャリア学部　1年		企画	観光・インバウンド
末松（すえまつ）　大和（ひろかず）	男	九州産業大学	商学部商学科　3年		記録・報告書	人材育成・教育
友野（ともの）　葉月（はづき）	女	中村学園大学	教育学部　3年		企画	人材育成・教育
鶴久（つるひさ）　拓磨（たくま）	男	福岡銀行	天神町支店	2班	リーダー	食・フードビジネス
石田佳奈子（いしだかなこ）	女	中村学園大学	流通科学部　2年		企画	観光・インバウンド
立石創太郎（たていしそうたろう）	男	九州大学	経済学部　2年		記録・報告書	人材育成・教育
十時（とき）　直大（なおひろ）	男	タカ食品工業㈱	東業務グループ		企画	食・フードビジネス
原（はら）　学哉（まなや）	男	添田町役場	地域産業推進課　農業振興係		記録・報告書	人材育成・教育
松尾（まつお）　薫（かおる）	女	福岡女学院大学	国際キャリア学部　1年		記録・報告書	食・フードビジネス
村上（むらかみ）　恭子（きょうこ）	女	九州大学	経済学部経済経営学科　2年		サブリーダー	観光・インバウンド
山之内玲奈（やまのうちれな）	女	西南学院大学	人間科学部児童教育学科　2年		企画	人材育成・教育
小柳（こやなぎ）　賢史（さとし）	男	西日本鉄道株式会社	鉄道事業本部	3班	リーダー	観光・インバウンド
河野（かわの）　泰士（たいし）	男	九鉄工業株式会社	福岡支店　古賀保線所		記録・報告書	人材育成・教育
橘（たちばな）　里佳子（りかこ）	女	北九州市立大学	外国語学部　1年		企画	観光・インバウンド
中村（なかむら）　天音（あまね）	女	九州大学	経済学部　2年		サブリーダー	食・フードビジネス
濱口（はまぐち）　結衣（ゆい）	女	西南学院大学	商学部商学科　2年		企画	食・フードビジネス
平川（ひらかわ）　祐太（ゆうた）	男	九州大学	法学部　4年		企画	人材育成・教育
水田（みずた）　智子（さとこ）	女	筑後市役所	市民生活部健康づくり課		記録・報告書	人材育成・教育
安永（やすなが）　麻紀（まき）	女	中村学園大学	栄養科学部栄養科学科　3年		記録・報告書	食・フードビジネス

第1次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
2016年9月3日（土）～4日（日）

訪問国の基礎知識や県内企業の海外展開、スタートアップ支援、郷土の歴史など、非常にレベルの高い講義を受けて、大きな刺激を受ける有意義な研修となった。

「福岡県グローバル青年の翼2016」の第１次研修が始まった。この時が団員同士初の顔合わせになるため、みな緊張した面持ちで研修の始まりを待っていた。

初日の午前中は、日本貿易振興機構アジア大洋州課田中麻里様より、「マレーシア及びアセアンの概要について」、そして中村学園大学教授占部賢志様より、「アジア太平洋と日本の絆」について講義を頂いた。

田中様からマレーシアの経済、生活、そしてASEANにおけるマレーシアの立ち位置など対面講義で分かりやすく教えて頂き、マレーシアについてより深く学ぶことができた。占部教授の講義では、国際交流とは何か、国際交流をするために必要なことは何かを教えて頂いた。国際交流するためには、日本人として自分を語ることの大切さを学ぶことができた。

午後の講義では、ビジネスデザインラボ代表神田橋幸治様より、「福岡型イノベーションエコシステムの現状と展望」について、そして田中藍株式会社取締役常務執行役員兼営業本部長田中克明様より、「グローバル戦略と人材育成について」の講義を頂いた。

福岡の官民両組織で業務に従事した経験を持つ神田橋様から福岡地域の強みや弱み、福岡地域の成長実現への課題などを話して頂いた。様々なグローバル事業、ベンチャー事業に挑戦する福岡の現状を知ることができ、非常に勉強になった。

田中様からは、田中藍株式会社の海外事業や福岡大学と連携したタイ国研修の説明を通して、グローバル人材の育成について話をして頂いた。福岡の企業が様々な国に進出する現状を知り、改めてグローバルな人材が育成されることの大切さを学んだ。

その後のグループワークでは、各班での役割分担を決めた。たどたどしい会話から少しずつ笑い声が増えていき、グループワークの最後ではみな笑顔で話をしていた。

１日目の夜には、県職員の方々を含め団員全員での懇親会が行われた。各団員が自己紹介をし、次第に会場は笑顔に包まれ、非常に楽しい時間を過ごすことができた。

２日目の午前中はオーケー食品工業株式会社　海外営業室室長兼営業企画部課長の本松洋様より、「海外展開とハラル取得～ムスリム市場へのアプローチ～」について講義を頂いた。ムスリム市場に事業を展開させるためハラル認証を取得し、実際に海外に売りに行ったことで得た知識や実体験をもとに話をして頂いた。ハラル認証取得の難しさ、自分自身や自分が暮らす地域について理解することの大切さを知ることができた。そして、自分たちが福岡県の代表として視察に行くのだと改めて認識することができた。

次にテーマ別のチームに分かれ、第２次研修（フィールドワーク）の分野別訪問先の検討を行った。各々がアイデアを出し合い、企画書を作成していき、お互いに知識を深めるとともに研修のテーマや目的を話し合うなど非常に有意義な時間であった。

台風の影響により、昼過ぎに解散となったが、２日間に及ぶ第１次研修が無事に終了した。研修が終わるころには初顔合わせのときが嘘かのように団員同士打ち解けていた。これからがいっそう楽しみになるような研修であった。

（文責：末松大和）

講義名	講師
「マレーシア及びアセアンの概要について」	田中　麻里　日本貿易振興機構　アジア大洋州課
「アジア太平洋と日本の絆」	占部　賢志　中村学園大学　教授
「福岡型イノベーションエコシステム」の現状と展望	神田橋幸治　ビジネスデザインラボ代表
「グローバル戦略と人材育成について」	田中　克明　田中藍株式会社　常務
「海外展開とハラル取得～ムスリム市場へのアプローチ」	本松　洋　オーケー食品工業㈱海外営業室室長

福岡地域の可能性や課題について語る神田橋様

研修風景

田中藍株式会社の田中常務による経営者視点の講義

加工食品の海外展開について語るオーケー食品工業の本松室長

第２次研修（フィールドワーク）

（一社）九州観光推進機構 2016年9月29日（木）
ホテルニューオータニ博多 9月30日（金）

観光・インバウンドチーム

福岡の企業などで実際に行われているインバウンドへの取り組みを2つの視点から学ぶ。

観光・インバウンドチームは、福岡の魅力を高め、さらにインバウンドを取り込んでいくためには、その取り組みの現状を把握する必要があると考えた。そこで、①インバウンド向けの施策や情報（魅力）の発信状況、②インバウンドの受け入れ態勢・サービスの現状の２点に主眼をおき、九州観光推進機構、ホテルニューオータニ博多を訪問し、現状に関する話を伺った。

九州観光推進機構：一般社団法人九州観光推進機構は、2005年に設立された九州の観光を国内外に発信する組織である。今回は、主にASEANの国々に九州観光の情報を発信している海外誘致推進部の藤波清孝様と古賀順子様から、インバウンド向けの施策や情報の発信状況などについてお話しを伺った。

九州のブランドイメージ（温泉）を確立するためにも様々な施策が進められており、温泉を求めて訪れる海外のお客様が多い。温泉以外にも地元密着型の施策があり、地元の熱意やおもてなしの気持ちが大切となってくるとのこと。それらは海外に向けて、SNSや海外で開かれる旅行博、旅行会社のPRの場である商談会、海外向けパンフレットなどで情報を発信されているそうだ。また、海外の映画やドラマロケ誘致により、観光客が口コミでロケ地を訪れるといった例もある。実際に、2013年佐賀県の祐徳稲荷神社や唐津城などがタイの映画ロケ地となり、タイからの観光客が急増したそうだ。

九州はアジアから近く、海外と九州を繋ぐ航空路線やクルーズ船が豊富であるため、観光客数が年々増加傾向にある。より多くの人に九州を訪れてもらうため、さまざまな計画、施策がなされていることが分かった。

ホテルニューオータニ博多：インバウンドを調べるにあたって、私達は観光客の受け入れ態勢も大切だと考えた。そこで「おもてなし」の現場を知るため、ホテルニューオータニを訪問し、宿泊料飲本部本部長松原大輔様、マネージメントサービス部企画プロモーション課中野沙織様にお話を伺った。

同ホテルが一番心がけているのが、食事面、多種多様な言語、その国の文化（宗教）に合わせたサービス、日本の伝統を伝える「おもてなし」である。そうしたサービスの中で印象的だったのは、九州初の自動貨幣両替機、イスラム教徒へのキブラ（お祈り用のじゅうたん）の貸し出し、看板の多国語表記、トイレマナーの説明、茶道の体験、着物の着付けなどである。今後は、お祈りが出来る部屋やお祈り前の足洗い場の設置を予定しているとのことだった。

今回の訪問で、同ホテルが海外からの多様なお客様に少しでも喜んでもらい快適に過ごしてもらう為に日々奮闘しており、その結果CS(顧客満足)、ES（従業員満足）、ホスピタリティに優れていて、私達の予想を上回るさまざまな取り組みを行っていることが分かった。

福岡のインバウンドに対する取り組みを2つの視点から学んだことで、たくさんの工夫や考えについて知ることができた。これからの研修では、他国のインバウンドに対する取り組みや考えについて話を聞き、福岡のインバウンド受け入れ態勢をよりよくするために何ができるかを考えたい。

（文責：窪田まりか）

お話を伺った藤波様と古賀様

九州観光推進機構にて

熱く語って下さった松原本部長と中野様

松原本部長、中野様との集合写真

自動貨幣両替機について説明して下さる松原本部長

第２次研修（フィールドワーク） 有限会社鵜ノ池製茶視察

2016年10月12日（水）

食・フードビジネスチーム

増え続けるムスリム。彼らのパワーをいかに取り込むのか？食の観点から学ぼうと、ハラール取得企業を訪問した。

食・フードビジネスチームは、製茶企業として日本で初めてハラール認証を取得した鵜ノ池製茶様を訪問した。現在の世界人口約73億人のうち、16億人をムスリムが占め、2020年には世界人口の四人に一人をムスリムが占めると言われている。私たちはムスリムをどのように理解し、ビジネスにつなげていくべきなのかを食の観点から学ぼうとした。

鵜ノ池製茶様訪問

海外研修で訪問予定のマレーシアは、総人口の約７割をムスリムが占める。日本と生活環境も食文化も異なる国と、どのように食ビジネスが行われているのか、これから先それをどう発展させればよいのかを考察するために、現在マレーシアへお茶を輸出している鵜ノ池製茶様を訪問した。

ハラールとは、イスラム法で「合法なモノ」を意味している。日本では馴染みのない言葉だが、ほとんどのムスリムはハラール認証を受けたことを証明するハラールマークがついている食品以外を口にしない。そのためハラール認証を受けることが、ムスリムが多数を占める国や地域でのマーケット獲得の大前提となっている。現在、日本の大手企業（味の素）がハラール認証を取得し、現地に工場を建設するなど精力的に活動する一方、他国との競争の厳しさや年一回の更新に費用や手間がかかるなど、課題も多いとのこと。

今回ご対応いただいた専務の岩部耕一郎様によると、アルコール類が禁止されているムスリムの国では、緑茶や中国茶などが好まれ、とても大きなマーケットだそうだ。お茶には、同じく口にすることが禁止されている豚由来の成分もアルコール類も無関係であるのに、なぜハラール認証を取得したのかというと、商品の包装紙に印字されたインクにさえもそうしたものの使用が禁止されていたからとのこと。

認証を得るために、インクメーカーから禁止物を使用していない証明書をもらう必要があったのだが、双方が未経験のため、非常に困難だったそうだ。また、岩部様は、「インターネットで得られるその国の現状やランキング、お茶の嗜好などの情報は、そのすべてが正しいわけではなく、直接自分の目で確かめよう」と思い、現地に何度も足を運ばれたそうだ。また、商社を通さずに自らの力でマレーシアの取引先を見つけて信頼関係を築きたいと考え、約２年間、現地での人脈を広げてビジネスの成功に至ったという話をお聞きして、とても感激した。

考　察

全国に先駆けて、お茶を大量に消費するムスリムに目をつけてハラール認証を取得する先見性、商社に頼らず自ら売り込みに行く姿勢は、海外と取引、あるいは海外で仕事をする上で欠かすことのできないものだと感動した。また、お茶は日本そして福岡の特産品である。世界的な“和食ブーム”にのり、緑茶や抹茶をもっと広めることも可能なのだとお話を伺いながら考えた。海外とのビジネスを成功させるためには、日本の魅力的なものを提供すること、そして失敗を恐れず努力することだと感じた。

（文責：松尾薫）

講義中の様子

店内から見える広い茶畑

ご対応いただいた岩部様と記念撮影

店の外観も素敵な鵜ノ池製茶

第２次研修（フィールドワーク） SEVEN SEAS International School視察

2016年10月12日（水）

人材育成・教育チーム

日本での国際的な教育現場を視察し、今後の日本の教育のあり方について考察した。

人材育成・教育チームでは、グローバル化が進む昨今、日本の学校教育現場においては、子どもの英語力の欠如や消極的な姿などの問題点があると考えた。そこで、日本での国際的な教育現場を視察し、今後の日本の教育のあり方を考えたいと思い、世界に通用する語学力と人格を備えた子どもを育成することに重点を置いている「SEVEN SEAS International School」を訪問した。

概　要

SEVEN SEAS International Schoolは、カナダの教育プログラムに基づき、ネイティブの話す英語に触れながら、世界に通用する語学力と人格を備えた子どもの成長と育成を目指す、原則として未就学児を預かるスクールである。特徴は、講師は全員外国人であり、子どもがスクールに登校した瞬間から、先生も子どもも英語で会話を始めることで、授業はもちろん、ランチや片付け、休み時間、友達との会話全てが英語のみで行われている。

見学内容

学校に着くと、子供達はレクリエーションを楽しんでいた。私たちも子ども達に混ざり、英語を使いながら体を動かすゲームに参加させていただいた。その後、３つのクラスをそれぞれ見学しながら、各クラスの特徴を知った。Thinker classAは、英語の基礎を固めるクラスであり、アルファベットや単語の書き方の練習が行われていた。Thinker classBでは、算数の授業が行われており、他にも、理科、社会の授業があり、小学校２～３年生と同等のスキルを身につけることができるそうだ。幼稚部では、ゲームを通して、英語で色の種類を勉強していた。

感　想

SEVEN SEAS International Schoolで驚いたことは、小さな子ども達が日本語を一切話さずに、英語のみで意思疎通ができていることだった。クラスは年齢や学力別に分かれていて、一人ひとりにあった指導が行われていた。

また、このスクールでは子ども達の積極性を感じた。たとえば、普通の幼稚園・保育園であれば、先生が絵本の読み聞かせを行い、子ども達が聞くスタイルが一般的である。しかし、ここでは、女の子が「私が読みたい。」と手を挙げ、先生と一緒に、他の子ども達へ英語の絵本の読み聞かせを行っており、主体的に活動する子どもの姿が多く見られた。

日中のクラスだけではなく、英語学童（夕方以降のクラス）や小学生向けのクラスといった多彩なクラスがあり、参加する子どもたちが多いとのことで、英語への関心が増していると考えた。

また、課外活動としてそば打ち体験やハロウィンパーティーなどがあり、日本と海外の文化に触れる活動があり、更にはインドやバングラデッシュなどの子どもたちとの交流などがあり、幼いときから国際感覚を身につけ、世界とのつながりを感じることができる取り組みが行われていた。

子どもたちが英語で楽しそうに活動している姿をみて、日本の学校教育のあり方については、SEVEN SEAS International Schoolから学ぶことは非常に多いと感じた。

（文責：友野葉月）

SEVEN SEAS International School外観

アルファベットの練習中

集中して英文を書く子供たち

英語で絵本の読み聞かせ

休み時間に団員も交じって遊ぶ。会話は英語で♪

第３次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
2016年10月15日（土）～16日（日）

渡航直前の宿泊研修。期待と不安が胸を去来したが、海外研修で多くのことを学んで来ようと改めて決意した。

10月15日（土）・16日（日）の二日間にわたり、第3次研修が行われた。初日は第2次研修の成果をテーマ別チームがそれぞれ約15分ずつ発表した。

午前の講義はオイスカ西日本研修センターの彦坂氏に、海外研修で訪問予定のミャンマーの研修センターの活動や概要を教えていただいた。彦坂氏がモットーとして挙げていた「土から離れない」という言葉の奥に多くの人との繋がりや活動が感じられとても印象に残った。また、現地の研修センターで学ぶ同年代の研修生たちが日本語を学んでいるということも知り、彼らと会うのが楽しみになった。

その後の講義にはメディカルグリーン株式会社の長根様から、ミャンマーでの薬用植物の栽培によるバリューチェーンの構築について学んだ。ミャンマーには日本の１．６倍もの資源があることや、気候の多様性のために、高付加価値のある色々な農作物が栽培されているということを聞き、未来のミャンマーの農作物に大きな興味を持った。また、BOPビジネス（Bottom of Pyramid）、つまり年収のピラミッドの下位層を狙ったビジネスはこれからのミャンマーの農業マーケットを大きく変えるものになるかもしれないというお話にはとても驚かされた。

午後からは北九州市立大学の篠崎准教授に、もう一つの訪問国となるマレーシアの歴史・人種・宗教についての講義をして頂いた。マレーシアが多民族国家であることは知ってはいたが、ブミプトラ（bhumi putra）という民族を区別したものや信仰宗教の違いなど教科書には載らない奥深いところまで聞くことができ大変有意義な講義だった。

二日目は、IT&IP会社のブロイゼ氏とみずトランスコーポレーションの水谷氏の「海外から観た福岡の魅力と課題」についての講義を頂いた。外国人から見た日本人の性格や視点の違いについて、また、なぜ福岡でのビジネスを始めたのかなどを詳しく熱く語っていただいた。講義の後、ブロイゼ氏の奥様（西南大学で教鞭をとられている方）にも参加していただき、英語でのスピーチ指導を受けた。普段、人前で英語でのスピーチをすることもないため団員も少し緊張気味だったが、堂々とスピーチを行ったり、積極的に質問したりするなど有意義な時間となった。

その後は、生活班に分かれてミャンマーのオイスカセンターでの夕食交歓会の出し物について話し合った。各班で、日本の文化を楽しく伝えて交流できるものは何か企画を練った。

最後に、講堂に集まり結団式が行われた。関好孝団長から一人、一人に団員証が手渡され身が引き締まる思いだった。いよいよ、３週間後に迫った海外研修に向け期待が高まるとともに多くのことを学び、吸収しようと改めて強く決意した。

（文責：松尾薫）

講義名	講師
「ミャンマー・パコックの研修センターについて」	彦坂　延良 （公財）オイスカ西日本研修センター
「ミャンマーでの薬用植物栽培によるバリューチェーンの構築について」	長根　寿陽 ㈱メディカルグリーン
「マレーシアの歴史・人種・宗教について」	篠崎　香織 北九州市立大学　准教授
「海外から観た福岡の魅力と課題」＆「英語スピーチ指導」	Joelle Bloise IT & IP Strategy Advisory Aldo Bloise IT & IP Strategy Advisory 水谷みずほ みずトランスコーポレーション

OISCAセンターについて説明してくださる彦坂様

マレーシアについて深く学べた篠崎先生の講義

株式会社メディカルグリーンの長根様に質問する団員

少々緊張気味の英語スピーチ指導

Aldo Bloise様による福岡の魅力と課題についての講義の様子

第４次研修 海外研修

日　程　表

日次	月日(曜) DATE	都市名 CITY	現地時間 TIME	スケジュール SCHEDULE
DAY 1	2016年 11/6 SUN	福岡空港集合	08:45	国際線2階へ
		福岡発	11:40	TG-649
		バンコク着	15:40	
		バンコク発	18:05	TG-305
		ヤンゴン着	18:50	
				ヤンゴン泊
DAY 2	11/7 MON		早朝	専用バス
		ヤンゴン発	06:30	7Y-121
		バガン着	07:25	専用バス
		パコック着	午前・午後	**○オイスカ研修センター視察**
				○現地の村や小学校訪問等
			夜	**○センターでの夕食交歓会**
				パコック泊
DAY 3	11/8 TUE		早朝	**○農業体験**
				○研修センター周辺視察（マーケット等）
			午後	○バガン遺跡群視察
		バガン発	17:55	YH-731
		ヤンゴン着	19:15	専用バス
			夜	**○夕食会（ミャンマー在住の方3名ほど）**
DAY 4	11/9 WED		午前	**○福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑献花**
			14:00	○視覚障碍者支援施設視察（GENKY）
		ヤンゴン発	19:30	AK-503
		クアラルンプール着	23:45	着後ホテルへ
DAY 5	11/10 THU	クアラルンプール	09:00	**○華人系小学校SJK(C) Kepong 1（人材育成・教育）**
			13:00	**○マレーシア政府観光局（観光・インバウンド）**
			15:30	**○ハラル産業開発公社（多様性理解）**
DAY 6	11/11 FRI	クアラルンプール	10:00	**○SPAD：陸上公共交通委員会（都市交通）**
			13:00	**○RG Fibre Industries Sdn.Bhd.（自動車産業とアントレプレナーシップ）**
			15:30	**○M&M Arc Sdn Bhd（食・フードビジネス）**
			19:00	**○マレーシア夕食交流会**
DAY 7	11/12 SAT	クアラルンプール	終日	**○マレーシア市内視察** 独立広場、セントラルマーケット、パビリオン、Lot10、伊勢丹、イオン、首相官邸、プトラ・モスクなど
		クアラルンプール発	21:05	TG-418
		バンコク着	22:10	
DAY 8	11/13 SUN	バンコク発	01:00	TG-648
		福岡着	08:00	着後、解散

出発式・移動（福岡→バンコク→ヤンゴン→オイスカ） 11月6日（日）～7日（月）

待ちに待った海外研修。それぞれの思いを噛み締めながら日本を出国。

９月から始まった３回に及ぶ国内研修を終え、いよいよ海外研修への出発日。８時45分福岡国際空港集合という朝早いスケジュールであったが、研修への期待で胸を膨らませながら皆しっかりと集まることが出来た。出発式では、関団長のお言葉に、福岡県を代表して海外研修に向かうということのありがたみを改めて感じ、その責任を感じるとともに気を引き締めた。国内研修でお世話になった県庁職員の方々からも激励のお言葉をいただき、握手を交わして搭乗手続きを行った。出発までの時間は、これから１週間を共にすることになる仲間と話をしたり、写真を取ったりとゆったりと落ち着いた時間を過ごした。

経由地であるタイのバンコクへの約６時間のフライト中は、早起きが響いたのか寝ている団員が多かった。バンコクで乗り継ぎを待つ時間は食事を取ったり、パコックでの夕食交歓会に向けて出し物の打ち合わせをしたりして過ごした。そこからヤンゴンまで飛行機に乗り、夜が更けてミャンマーの中心都市ヤンゴンに到着した。ヤンゴンは福岡に比べ大変蒸し暑く、団員の口からは「暑い」という言葉が多く出た。そこからバスに乗り込み、空港近くのホテルに移動し、そこで初めてミャンマーでガイドを務めてくださるナンさんとお会いした。ホテルではウェルカム・ドリンクをいただき、各自の部屋へと移動した。その後は翌日の夕食交歓会に向けて各生活班で遅くまで準備をした。

2日目も早朝５時にロビー集合という過酷なスケジュールであった。皆、眠そうな表情でバスに乗り込み、国内線の空港へと向かった。国際線とはちがい、天井に頭がつきそうなほど小さなプロペラ機に乗り込みヤンゴンを後にした。バガンのニャンウー空港に到着後、バスに乗り込んだ。このバスにはオイスカ研修センターの木附文化（きつき・ふみお）様も同乗してくださり、道中でオイスカ研修センターについて簡単に説明してくださった。バスでの移動は約２時間に及んだのだが、パコックのオイスカ研修センターに近づくにつれ、徐々に建物がなくなり牛やヤギなどが多くみられるようになった。

日本で見る田舎の風景とはまた違う、なんとなく茶色掛かった大自然が一面に広がっていた。ヤンゴンの街中と大きく異なる景色や、日本で当たり前に見られるはずの整った道路、高いビルがここでは簡単には見つけられないということに衝撃を受け、これから見る新しい世界に胸を躍らせながらオイスカ研修センターに到着した。

（文責：中村天音）

出発式にて関団長より激励の言葉

いよいよ出国。女子団員での集合写真。

初日に滞在したヤンゴンエアポートホテル

パコック行きの航空券

ミャンマー／ AM　移動・オイスカ研修 11月7日（月）

日本の国際NGOが20年に渡って取り組む農業技術支援、人材育成の現場を体感した。

公益財団法人オイスカは1961年に設立、”すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界”を目指して本部を日本に置き、現在26の国と地域に組織を持つ日本発の国際NGOである。国際的な農業開発協力や環境保全、人材育成などを行なっている。1996年に設立されたミャンマー・パコックのオイスカ研修センターでは私達と同世代の研修生、男女合わせて23名が農業の技術、知識、日本語等を学んでいる。350名ほどの卒業生のうち、100名ほどは日本でも研修を受けた経験があるそうだ。

モウ・インさん（総務課長）より、流暢な日本語でのセンター概要について説明を受けた後に、センター内を視察させて頂いた。国内での研修時に、「ミャンマーの研修センターは、当初は荒れ果てた何もない大地だった」との話を伺っていた為、初めて施設を見たときは想像以上に立派で、緑豊かな周辺の環境にも衝撃を受けた。施設内の広大な田んぼでは日本の「あきたこまち」が作付けされていた。現在は実験中であり、成功したらヤンゴンで売ることを目標としているが、課題は輸送コストだという。

また、スズメが米を食べないよう、爆音機での鳥獣被害対策も行われていた。日本と同様の対策方法であるようだった。この田んぼは強アルカリ性の土壌を何年もかけて有機肥料により改良し、同じく強アルカリ性の周辺の水は使えないため、遠くの水源地から水を引いてきており、現在では安定した収穫が得られるようになっているとのこと。化学的な肥料や農薬は使わず、自然農薬の作り方も学び、有機農業に取り組んでいた。センター内には託児所やパンの製造工場もあり農業以外にも様々な活動がされていた。ケーキ、パンは無添加で非常に人気だそうだ。

2005年からは周辺地域で32本もの道を作っており、以前は、雨が降ると学校や病院にも行くことができなかったが、大きく改善され、住民が生活を送る上での重要なライフラインになっていた。総勢34名の現地職員（研修経験者）で運営されており、地域雇用の創出にもつながっていると感じた。日本語が達者でフレンドリーな方ばかりで私たちもすぐに打ち解けることができた。研修生はこのセンターで11ヶ月間の研修を経て地元へ戻り、将来的に地域のリーダーを目指すとのこと。皆日本式の規則正しい生活を行い、勉強に励んでいた。センター職員の方が「農業は同じやり方をしても上手くいかない。地域差もある。ここでは農業の勉強のやり方を勉強させています」と語ってくださった。農業で一人前になるには最低10年はかかるそうだ。実際にやってみて考えることの繰り返しが大事ということを学んだ。今後は卒業生のフォローアップにも力を入れていくそうだ。

（文責：井本大輔）

モウ・インさんによる日本語でのセンター説明

6次産業化のためのパン工場

有機野菜を栽培している畑

Day Care Center（託児所）も併設されている

ミャンマー／ PM　研修&夕食交歓会

11月7日(月)

現地の小学校を訪問。大勢の村人の大歓迎を受けた。夜にはオイスカ研修センターでの夕食交歓会。笑いの絶えない、忘れられない思い出となった。

グループ・ディスカッション

午後からはオイスカ研修生とのディスカッションを行なった。初めはみんな緊張の面持ちだったが、それぞれの家族のことや日本の文化とミャンマーの文化について互いに聞きあったり、日本語とビルマ語、少数民族の言葉などを教えあったり、お互いの名前をそれぞれの言語で書きあったりするにつれて、笑顔が溢れワイワイと会話が弾むようになった。研修生それぞれが自分の民族の文化を誇らしく嬉しそうに語る姿がとても印象的だった。団員もオイスカ研修生も互いの話に興味津々で、終わりの時間が来ても話し続ける姿から、話足りない・聞き足りない様子が伺えた。夜の交歓会でまた会うことを約束して、団員一行はサーレンガオ村へ向かった。

サーレンガオ村の小学校訪問

研修センター周辺にあるサーレンガオ村では小学校を訪問した。サーレンガオ村に着くと、村人たちが踊りで団員を出迎えてくれた。小学校までの道には村人が途切れることなく並び、「ミンガラーバ！（こんにちは、の意味）」と笑顔で手を振りながら声をかけてくれ歓迎してくれた。予想もしない大歓迎に団員たちは驚き、嬉しげに村人一人一人と挨拶を交わしながら小学校へ向かった。小学校の講堂の中は村人と団員でいっぱいになり、賑やかな雰囲気の中、生徒たちの歌と踊りが始まった。華やかな民族衣装を着た生徒たちによるミャンマー伝統の踊りが披露されたあとで、生徒たちと団員とで一緒にミャンマーの国民的なゲームを行なった。生徒も団員も今回の交流に目を輝かせて取り組み、別れを惜しむ姿がとても印象的だった。歓迎の様子や別れを惜しんで団員たちの乗るトラックを追いかけ見送ってくれる様子から、心を尽くして相手をもてなす一期一会の精神をミャンマーで感じることができた。

オイスカ研修センターでの夕食交歓会

オイスカ研修センターでの夕食交歓会では、たくさんのミャンマー料理と、研修生たちによる出し物でもてなしを受けた。研修生たちはそれぞれの出身部族の民族衣装を身に纏い、楽しげに踊りを披露してくれた。団員側からは、書道パフォーマンスや相撲、コスプレをしたダンスパフォーマンスに叩いてかぶってじゃんけんぽん、日本にまつわる絵描きリレーが披露され、研修生も交えて楽しんだ。出し物に参加してくれた研修生には日本の駄菓子がプレゼントされ、研修生たちは嬉しそうに分け合っていた。また女性団員は全員で浴衣姿を披露し、その華やかさに研修生たちは見入っていたように思う。会も終わりに近づくと、研修生たちが披露してくれたダンスを団員も交えて踊り、その交流は一層深いものになっていった。ビルマ語と日本語、互いにことばを理解する難しさはあったかもしれないが、言葉の壁を超えて笑顔の絶えない楽しく有意義な交歓会だった。

（文責：立石創太郎）

オイスカ研修生とのディスカッション

盛り上がった夕食交歓会

サーレンガオ村の小学校。踊りや歌で歓迎してくれた。

夕食交歓会での出し物。研修生とたたいてかぶってじゃんけんぽん！

ミャンマー／ AM　オイスカ研修

11月8日(火)

農業体験や市場視察を通して触れたミャンマーの生活。

オイスカ研修センターでの農業体験

オイスカ研修センター 2日目には実際に研修生たちの日々の生活を体験させていただきました。毎朝５時に起床してラジオ体操をし、元気に朝の挨拶をしてから１日がスタートします。研修生ひとりひとりが時間や規律をしっかりと守り、集団生活が送られていました。

研修生たちは「農業」「食品加工」「養豚」などの実習を毎日受けています。そのなかで私たちは「農業」の分野で実際に田んぼでの稲刈り体験をさせていただきました。世界各地にあるオイスカでは、各国の気候に適した農業技術を導入して、その土地の実情に即した技術が指導されています。ここミャンマーのパコックにあるオイスカ研修センターの周辺は、乾期の水不足や強アルカリの水によって米作りが難しいとされていた痩せた土地だったそうですが、広大な土地に日本米の稲がたくさん実っていました。職員の方々の指導や、研修生たちの努力の賜物であると感じました。稲刈りでは、みんなで裸足になって泥だらけになりながら一生懸命に稲の収穫をしました。カマを使って、手作業で稲を刈る作業は思いのほか大変で、初めは田んぼの泥に足を取られながら苦労しましたが、次第に慣れてきて黙々と作業に夢中になっていました。初めての農業体験はとても楽しく、終わった時には達成感を感じました。また農業の難しさや大変さを実際に体験し、食べ物のありがたみを再確認させていただきました。

パッカンジ村の朝市視察

オイスカ研修センターから車で３分ほど移動したパッカンジ村の朝市を視察しました。市場には周辺で収穫された野菜や肉が販売されていました。客の目の前で実際に鶏をさばいている光景や、見たことのない種類の野菜や料理を目にし、実際に蒸しパンに揚げをはさんだ食べ物などを購入して食べていた団員もいました。まだ陽が昇り切らない、薄暗い早朝にもかかわらず、買い物客や露店を出す人で賑わっている市場はとても活気がありました。

パコックでの市場視察

研修センターから１時間ほど移動したパコック県の中心地にある、パコックの街の市場を視察しました。市場周辺は車やバイクが行きかっており、賑やかな繁華街にたくさんのお店が連なっていました。食料品や加工食品、化粧品、衣料品、生活用品を扱うお店にはたくさんの買い物客が集っていて、活気がありました。団員それぞれ市場を巡りながら両替したミャンマーの通貨であるチャットで、記念のお土産などを購入していました。そのなかでミャンマーの民族衣装で、普段着でもある様々な色や柄の「ロンジー」という巻きスカートを団員皆が購入していました。そのあとの視察では、みなロンジーを着ていました。通気性がよく快適で、着心地の良いものでした。

（文責：橘里佳子）

稲刈り体験　みんなで頑張りました！

パッカンジー村の朝市視察

作業が終わってみんなでチーズ

ロンジーを購入したパコックの市場にて

ミャンマー／バガン視察、ヤンゴンタ食交流会　11月8日(火)

バガン遺跡群の壮大な景色に心を打たれ、ヤンゴンでは現地で活躍されている方々との夕食交流会を通じて、今まで知ることのなかったミャンマーの現実を知った。

バガン遺跡視察

まず、バガン遺跡群で最大級のアーナンダ寺院を視察した。地元の方と観光客で賑わう参道を超えた先に白亜の寺院があり、内部に納められた４体の仏像は表情に違いがあり興味深かった。ミャンマー寺院の内部を見学する際には、入り口付近で履物を脱がなければならないため、素足で直に触れる大理石の床の冷たさが心地よかった。

次に、シュエサンドーパゴダを視察した。階段を上った先からはバガン遺跡群を一望でき、日本では決して見ることができないであろう広大な景色が広がっていた。天候にも恵まれ、青い空と白い雲が、緑の大地に建つ遺跡群の荘厳さをさらに際立たせる中、団員それぞれが気に入った景色を写真に納めていた。

最後に訪れたのはティーロミィンロー寺院である。寺院の周りには、鮮やかな色で作られたロンジー（ミャンマーで日常的に着用されている伝統的民族衣装）や、繊細な表現がなされた砂絵などを売るお店が立ち並んでいた。その中には、手足や首に金属の輪をはめた首長族が商売をしているお店もあり、伝統的な機織り機で丁寧に作られた布が数多く並んでいた。寺院の中には4体の大きな黄金の仏像が、それぞれ東西南北を向いて安置されており、仏教を描写した壁画も見ることができた。

ミャンマーで活躍されている方々との夕食交流会

バガン観光を終え、夕方、国内線の飛行機でヤンゴンへ戻った。到着後、現地で活躍されている日本人３名の方との夕食会交流会を開催した。現地で長年携わってこられたからこそ感じることができるミャンマーの現状や、日本の豊かさ、貧しさを、ご自身の体験談なども交えた貴重なお話を聞くことができた。日本にいては決して知ることのできないミャンマーの姿を知った私たちはそれぞれの方法で、この体験を周囲の伝えていくべきだと感じた。

（ご参加頂いた3名の方）

●**西垣充 様**（ジェイサットコンサルティング代表取締役）

ヤンゴンで企業されて既に19年。人材育成・派遣、ビジネスコーディネートなど幅広い分野で活躍されている。視覚障がい者自立支援のために運営するマッサージ店「GENKY」を、翌日視察させて頂いた。

●**渡辺桂三 様**（福岡市水道局からヤンゴン市水道局へ出向中）

福岡市の水道環境技術を導入し、ミャンマーの水道環境改善に尽力されている。昨年度に続いて夕食交流会にご参加いただいた。

●**堤雄史 様**（SAGA国際法律事務所　代表）

2014年にヤンゴンで法律事務所を設立された。現在では、ミャンマー駐在期間が最も長い日本人弁護士として、日本人だけではなく地元の人からの信頼も厚く、活躍されている。

（文責：井口由貴）

ティーロミィンロー寺院で機織りをする首長族の方

綺麗な眺めと共に

夕食交流会での集合写真

パゴダの頂上をめざして

福岡市水道局から派遣されている渡辺桂三さん

談笑する堤さんと団員

ミャンマー／福岡県戦没者慰霊碑、「GENKY」視察、マレーシアへ移動　11月9日(水)

「福岡県戦没者慰霊碑」に献花を行い、視覚障害者の自立支援のために日本人によって運営されているマッサージ店を視察した。

ミャンマー滞在最終日。ヤンゴン市内から40分程度バスで移動して日本人墓地に到着し、敷地内にある「福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑」を訪れた。70年以上前の太平洋戦争当時、ビルマ戦線へ門司港から30万人以上の日本人が出征し、半数近くの方が戦死されており、そのうち福岡県出身の方も多く、およそ1万4千人の方が望郷の念を抱いてこの地で亡くなったそうだ。今の福岡県内に生きる団員１人１人が、厳かに献花を行い、焼香をあげ黙祷を捧げた。なにより驚いたのが、すみずみまで清掃が行き届いているところだ。管理してくれている現地の人々が、この場所を、ゴミ１つなく、守っていてくれていることに感動した。

ヤンゴン市内へ戻り、視覚障害者が働く「GENKY」というマッサージ店を訪れた。ここは、前夜の夕食交流会にもご参加いただいたジェイサットコンサルティング代表の西垣充さんが運営する、視覚障害者の自立支援のために設立された、ミャンマーで初めての社会福祉省公認のマッサージ訓練治療院である。設立したきっかけの一つは、以前はミャンマーでは質の高いマッサージを提供する店が無く、そうした店を探していた西垣さん自身が「無いのならば自分で作ろう」と思い立ったからだと聞きとても驚いた。

もちろん、そんな単純な理由だけではないだろうが、ここまでできる行動力に感銘をうけた。店舗の利益を運転資金としており、行政の補助金や各種の寄付金に頼ることなく運営されているそうだが、メディアPR等で効果的な宣伝を行っており、働いている視覚障害者のマッサージ師の給与は比較的高く、そのため結婚して家庭を持つ方がほとんどだった。

店内を視察させて頂いている時も常連客が数名来店しており、繁盛している様子だった。しかし、来世での生まれ変わりを信じる人が多いミャンマーならではの「障害を持った人は前世での行いが悪かったのだ」という考えや、障害への正しい理解が無いために「触っただけで障害が伝染してしまう」という偏見があるという課題もあるとのことだった。

そういう無知からくる偏見も吹き飛ばしてしまうのではないかと感じるほど、西垣さんはパワフルな方だった。

多くのことを考えさせられた「GENKY」の視察を終え、ミャンマーでの最後の夕食を楽しみ、ヤンゴン空港で初日からお世話になった通訳のナンさんと、「ミャンマーにまた必ず来ます」と約束して別れを惜しんだ。たった4日間ではあったが、素敵な人たちとの出会いに感謝しながらミャンマーを出国した。

そして、ヤンゴンから3時間弱。研修2か国目であるマレーシアのクアランプールへ到着し、ホテルに辿り着くころには日付が変わっていたが、目の前に広がる煌びやかな大都会に興奮が収まることはなかった。

（文責：原学哉）

団員による
福岡県ミャンマー戦没者
慰霊碑献花

GENKYにて西垣さんとのトークセッション

GENKY前にてみなさんと集合写真

マッサージ師のみなさんとも意見交換しました

マレーシア／ AM　華人系小学校訪問　11月10日（木）　人材育成・教育チーム

華人系とマレー系、インド系など多様な児童が一緒に学ぶ「華人系」小学校の授業を見学し日本と比較することで、日本の学校教育のあり方について考えた。

1. マレーシアの教育概要

マレーシアの教育制度は初等教育６年、中等教育が5年となっている。小学校段階ではマレー語を使用する国民学校SK、中国語を使用するSJK(C)、タミル語によるSJK(T)が設置されており、いずれの学校においてもマレー語は必修科目である。また小学校、中等教育学校の各修了時点に国家試験が実施され、この成績に応じ、進学先が決定される。今回訪れたSJK(C)は華人系の小学校で、1学年は7クラス、各クラスは40～50人で全校生徒が約1800人の学校であった。

2. 授業見学

学校に到着すると先生と生徒が迎えてくれた。団員代表の末松さんが英語で感謝のスピーチをし、最後にマレー語と中国語で挨拶をすると大きな拍手が起こり、とても暖かい雰囲気を感じた。

メンバーを5つのグループに分け、各グループには人材育成･教育チームが一人ずつ入り、授業見学を行った。見学する授業はそれぞれ、中国語･英語･マレー語。言語の授業はそれぞれの言語のみで行われていた。しかし、言語以外の授業は華人系の生徒がほとんどということもあり、日常的に使用する中国語で行われている。高学年にもなると中国語･英語･マレー語それぞれの言語で新聞を読めるようになるというのを聞いてとても驚いた。授業は教室の前にある電子黒板を使用して行われている。この電子黒板は音声も出すことができ、音の重要な言語の授業では非常に有効なツールであると感じた。

また、授業は１コマ30分と日本よりも15分短く、子どもの集中力を高めることで質の高い授業が展開されていた。

3. 休憩時間

授業見学を終えると休憩室に案内され、中華･マレー ･インドの伝統的な御菓子（“ちまき”やケーキのようなもの）をいただいた。ここでは伝統料理をいただきながら、学校の規模やどのような教育を行っているか等の学校についての話を聞くことができた。ちょうどこの時に生徒たちも休憩時間になったらしく、たくさんの生徒がカフェテリアに飛び出してきた。この学校では午前と午後に30分ずつ休憩時間があり、一箇所に集まってクラスを越えて遊んだり、おやつを食べたりしていた。

4. 感想

視察を終えて感じたことは、子供たちがとてものびのびとしていて、積極的に授業へ参加していたということだ。先生が質問したことに対しては全員が手を挙げて答えようとしていた。先生もそれに答えるように、感情をこめて文章を読めた生徒は、ほめてあげるなど積極的にコミュニケーションをとっていた。

日本においては、この学校よりもさらに実用的な英語教育を取り入れていくべきだと感じ、また生徒の積極性を引き出してあげる指導方法や、先生と生徒の意思疎通がきちんと出来る良好な関係というのはもっとも大事にするべきことではないかと感じた。

（文責：河野泰士）

元気な子どもと。
可愛い！

艶やかな字浴衣姿。
学校からのリクエストでした

授業にも
お邪魔させて
いただきました

学校のことを教えてくれた先生方と

元気いっぱいの子ども達

マレーシア／ PM　マレーシア政府観光局　11月10日（木）　観光・インバウンドチーム

緻密なマーケティング戦略で、世界中から観光客を呼び込んでいるマレーシア政府の政策について学び、福岡のインバウンドについて再考した。

マレーシアは、2015年度の調査によると、年間の外国人観光客数（インバウンド）が世界第14位と日本より多くの観光客が訪れている国である。（なお、日本は第16位である）。そこで私達は、何か秘策があるのではないかと考えた。彼らの施策を学んで福岡のインバウンドの更なる発展に繋げたいと思い、マレーシア政府観光局を訪問した。

昨年度のマレーシアの観光収入は691億RM（日本円にして約2兆円）にのぼり、その額の大きさに驚かされた。ちなみに日本からの観光客は昨年度に比べて今年は15％下がっているそうであり、そのため、マレーシア政府観光局は日本そして世界中からのインバウンドの増加を狙って様々な施策を実行していた。

中でも特に印象に残ったのは、マーケティング戦略のPromotionに力を入れている事である。マーケティング戦略とは、主に４Pからなり、Price（価格）･Place（流通･場所）･Product（製品･商品）･Promotion（宣伝広告･販売促進）の事である。マレーシア政府観光局は自分達の強みを正確に理解した上で、どこをポイントにし、どう売り込んでいけば良いかを考え、世界各国・各地域の観光客のニーズ（機能・目的）に合わせてアピールポイントを変えていた。

例えば、日本に対しては、スポーツ・買い物（美容）を重点的にPRしており、日本人が好みそうな情報を日本語で伝えており、SNS（Twitter・YouTube・Facebook）などのデジタルプロモーションの導入やマス媒体の活用により、多くの日本人が無意識にマレーシアと関わることの出来る環境作りを行っていた。福岡もインバウンドに力を入れており、多言語でのウェブサイトはあるものの内容はどこの国・地域に向けても同じであり、かつ自己のPRを優先しがちな福岡のやり方よりも一歩先を進んでいると感じた。

そして、宣伝のために日本の大都市（東京や大阪、名古屋、福岡など）を走らせているラッピングタクシーに関する事例は驚いた。日本のタクシードライバーをマレーシアに招待して、実際にマレーシアの事を現地で学んでもらい、ファンになってもらって、日本に帰ってからはタクシーに乗ったお客様にマレーシアのことを宣伝してもらうという何とも大がかりなプロジェクトをやってのけているのだった。

このPromotionに特化したマーケティング戦略、そしてムスリム対応については福岡は学ぶべきものがとても多いと感じた。ムスリムが圧倒的多数を占めるマレーシアでは、当然ながらムスリム専用のホテルがあり、天井にお祈りの方向を示したサイン（キブラ）や、お祈り用の部屋・水場も整備されている。

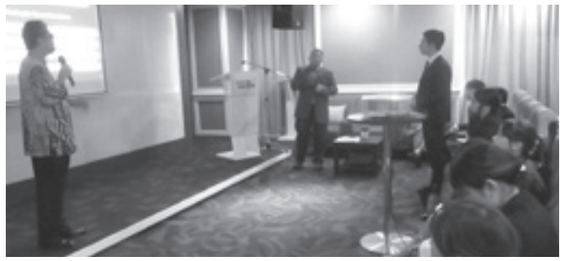
東京オリンピックのころには、今より更に多くのムスリム観光客が福岡を訪れることが想定されるため、ムスリム対応に力を入れることは重要だと感じた。例えば、ムスリムでも気軽に購入できるお土産を作ることで、より幅広い観光客のニーズに対応し、観光で福岡を活気付けることが出来るのではないかと思った。

（文責：石田佳奈子）

ご対応いただいた
Senior DirectorのMUSA様。
とても気さくな方でした

MUSA様ほか観光局の皆さんと

最初の挨拶をする橘さん


積極的に質問する団員の様子

マレーシア／PM　ハラル産業開発公社(Halal Industry Development Corporation) 11月10日(木)　多様性理解

したたかにハラル・ビジネスのグローバル・ハブたらんとするマレーシア。レクチャーを通じて“ハラル”について深く理解した。

ハラル産業開発公社(以下、HDC)の「Global Halal Support Centre」に入るとまず、世界各国のハラル認証を受けた数々の商品が目に飛び込んできた。世界にはこんなにも多くのハラル商品があることに驚かされた。今回の訪問ではハラルについての講義があった後に、それぞれ今まで疑問に思っていたことを質問し、ご対応いただいたSenior ManagerのMohamad Romzi Slaiman氏がとても詳しく解説してくださった。

ハラルとは、“イスラム教の規律に基づいたもの”のことをいう。ハラルは食品だけだと思われることが多い。私もそう考えていた一人である。しかし、食品だけではなく、コスメや消耗品などの商品や、インフラ、サービスまでもがハラルに含まれるそうだ。ハラル認証を行っている機関は多くあるが、HDCは世界で唯一政府機関がハラル認証を行っている国であり、“マレーシアをハラルハブに”というビジョンを掲げている。マレーシアのハラル認証は厳格なものであるため、その基準を満たした製品は世界中のイスラム圏にて受け入れられているようだ。

ハラルは製品の原材料から、製造現場、包装、搬送、流通、販売までのすべてのながれが安心で安全で清潔である条件がそろうことで初めて成り立つという。言い換えれば、ハラルは製造者だけではなく書品が手元に届くまでの全てのプロセスが大事になってくるのでひとつでもかけることはできない。ハラルはイスラム教の規律を満たすだけでなく、安心・安全という点にも力を注いでいるためイスラム教徒ではない人々にとってもハラルマークは“安心である”ということの目印になると理解できた。

現在、ムスリムの人口は増え続いているため需要がうなぎ上りの状態である。一方で、製造する原材料や製造現場、流通チャネルなどのハラルのためのシステムの確立が追いついていないため供給を確保できていない。つまり、需要と供給のバランスがとれていない。これはこれからの大きな課題である。この課題解決には大きなビジネスチャンスがあるため、マレーシアは国をあげて活動している。

4年後の2020年には東京オリンピックが開かれ、多くの外国人観光客が日本にやってくるのは間違いない。そのなかでもイスラム教徒が占める割合が高いため彼らをターゲットにした取り組みは必要不可欠である。それにとりこむことで大きなビジネスチャンスをつかむことが可能である。これをきっかけに日本国内に今より多くの食品をはじめとしたハラル認証をうけたものを増やしていく努力が必要だと思う。

ハラルは一言で言い表せるほど簡単なものではないことを学んだ。ハラル認証は安心であることやビジネスチャンスの可能性があることを今回の研修で学ぶことができた。私たちがまだまだ知らない多くの可能性が潜んでいる。しかし理解しようとすることをやめずに、お互いに尊重していくことがこれからの私たちに必要なことであると思う。

（文責：濱口結衣）

真剣にレクチャーを聴く団員

ハラルについて丁寧に説明いただいたRomziさま

KL伊勢丹LOT10で見つけた沢山の種類のお醤油

ハラル公社の入り口で記念写真

世界各国のハラル商品の展示コーナー

マレーシア／AM　SPAD(陸上公共交通委員会) 11月11日(金)　都市計画・インフラ

マレーシアの公共交通を司る国家機関(SPAD; Suruhanjaya Pengangkutan Awam Darat)を訪問し、国家レベルの視点からの交通事情や政策について学んだ。

（1）クアラルンプール（KL）の交通事情

首都KLは、高速道路網も充実しているほか、鉄道が３路線(うち１路線は国際空港直行の特急路線)、LRTが２路線、モノレールが１路線あり、さらにBRT（バス高速輸送システム)の整備も進められている。BRTは、高速道路のような高架式の専用レーンを有するシステムとなっており、定時性、速達性に対する熱意が伝わってきた。

しかしながら、都心部には慢性的な渋滞が生じていた。私たちが滞在した数日間のバス移動でも、幾度となく渋滞に見舞われ、予定通りに目的地に到達することは困難な状況にあった。

（2）SPAD（陸上公共交通委員会）の取り組み

SPADは、日本の国土交通省に似ているが、更に省庁を横断する権限が付与された首相府直轄の機関で、交通部門において各省庁、各自治体をリードする機関である。交通政策の立案や、バス・タクシー・貨物輸送といったあらゆる運輸事業に対する規制や監督を行っているほか、SPADアカデミーという専門の教育・研究機関も有している。

SPADは、2020年までに先進国入りするというマレーシアの国家目標「ビジョン2020」に関連して、公共交通の利便性や質の向上のために様々な取り組みを展開していた。

中でもユニークだと感じたのは、運賃無料の市内循環バス「GoKL」である。バスは5～10分間隔で運行され、駅や主要観光スポットなどを結んでいる。公共交通の利用を促すことで渋滞を緩和するだけでなく、観光客にとっても恩恵は大きい。GoKLの利用者は年々増加しており、運行を開始した2012年は１日の利用者が8,500人程であったが、2015年は38,000人を超えるなど大変好評のようだった。

また、従来、法外な料金を請求するなどの悪質なドライバーが多かったことを受け、SPADはタクシー業界の刷新にも熱心に取り組んでいる。具体的には、タクシー事業者の収入改善や料金体系の整備、個人タクシーの営業ライセンス「TEKS1M」の導入といった施策を段階的に実施している。その中で特に私が魅かれたのは、独自に開発した「Meter On」というアプリケーションである。同アプリは、タクシーの車のナンバーを入力すれば、運転手の情報を入手できるほか、ルートや運賃を予測する機能も付属しているタクシー利用者の不安を取り除くためのツールだ。なお、マレーシアでは「My Kad」というICカード型の身分証明書があるそうだ。このカードは、各種交通機関の運賃や高速道路料金の支払いが可能で、ATMカードや運転免許証としても機能するというから驚きである。このようにマレーシアでは、交通機関をはじめとして、積極的にICTを取り込んでいるようだ。

（3）むすび

福岡でも同様に、地下鉄の延伸やBRTの導入など公共交通の革新に力を注いでいるが、まだまだ課題はあると思われる。ハード・ソフト両面から問題にアプローチするマレーシアの事例から学ぶことも多いのではないだろうか。なお、同国では現在、新たな交通機関として日本の新幹線の導入を検討している。SPADは日本大使館との関係も密で、今回の視察もJETROと日本大使館のお力を借りて実現したとのことである。今後の動向からも目が離せない。

（文責：小柳賢史）

KL市内を走るバス(GoKL)

SPADの前で集合写真

ご説明いただいたAishah氏

乗車したLRT

ガイドに見せていただいた「My Kad」

真剣に説明を受ける団員達

マレーシア／PM RG Fibre Industries Sdn Bhd 11月11日(金)

自動車の排気システムやマフラーを製造する華人系の現地企業“RG FIBRE Industries Sdn.Bhd”を訪問し、アントレプレナーシップ(起業家精神)について学んだ。

マレーシアという国は、マレー人60%、華人20%、その他をインド系やその他人種等で構成される多民族国家である。このような人種構成の中、マレーシア政府が1971年から開始した経済政策「ブミプトラ政策」により、大学入学や公務員の採用、企業の設立や租税の軽減などの経済活動において、マレー人に対する優遇政策が実施されてきた。そのような政策が展開され、目立った後ろ盾がない中で起業し、事業拡大を行ってきた華人系であるRemen氏にアントレプレナーシップ(起業家精神)についてお話を伺った。

私たちが訪問させていただいた“RG FIBRE Industries Sdn.Bhd”は、自動車の排気ガス中の有毒ガス成分を低減する装置やマフラー、排気システムの製造を行う自動車産業の会社である。創業者で社長のRemen氏は、非常に貧しい生い立ちで経済的理由から高校にも進学できず、当初は工場で一般労働者として勤務し生活費を稼いでいた。その後大変な努力を重ねて徐々にステップアップし、マネージャーとして大手企業に勤めたりしていたが、以前より自身のブランドを持つことが夢であったことや自分の会社を経営したいとの強い想いがあったことから、アジア通貨危機を契機に最後に勤めていた会社を退職し、1999年に独立して現在の会社設立に至る。

Remen氏のお話では、起業にあたり経営者には様々な問題が発生するとのことだ。身体的・精神的なストレス、家族の問題の他にも、自身の資産や貯蓄の全てを注ぎ込む覚悟が必要であり、Remen氏もその例外ではなかったとのことである。会社の経営者として創業時の準備に加え、経理やビジネスプランの構想等、やるべきことが多くあることから、起業するには相当な覚悟と決意、そして体力が必要であると感じた。

Remen氏が事業展開する上で、最も重要視していることが“質”であるそうだ。高い“質”を生み出す為には、失敗を恐れずに挑戦することが重要である。チャレンジと失敗を繰り返すことで、より“質”の高い製品やサービスを提供できると考えているとのこと。実際に当社では、自社製品が国際基準を満たせるように海外の展示会への参加を重ねており、現在ではマレーシアの街中を走る車の半数が当社製品を使用したものであり、また、ホンダ・ダイハツ・トヨタ等の日本メーカーの車にも当社製品が多く使われている。より良いモノを作りたいとの向上心が事業基盤の拡大には重要であると感じた。

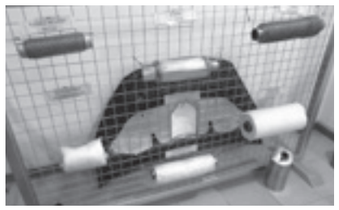
私がRemen氏の言葉で強く印象に残っているのが「ビジネスは車の運転と同じだ。目的地に早く着こうと近道を選択し急げば、事故を起こす。確実に目的地に到着するにはゆっくり進むべきだ。」という言葉である。ビジネスにおいては、人が求めていること、「何」を「どこ」で「どうやって」売るのか、という慎重かつ丁寧なマーケティングが大事ということであった。しかし、私はこの言葉は起業やビジネスに限らず、何かを達成しようと行動する際の本質を捉えていると思った。

現在福岡県、特に福岡市は起業家を目指すビジネスマンへの自治体からの支援体制が非常に厚い為、今後は起業を企図する若者が多くなるであろう。その一方で、経営者としての覚悟や慎重さ、明確なビジネスプランを持つことが不可欠であると改めて感じた。

（文責：靏久拓磨）

熱く語る
Remen Goh氏。

RG Fibre外観。工場ラインは機密保持の為見学できませんでした


製造しているマフラー内部の触媒

Remen氏の講義を真剣に聞く団員たち

Remen氏を囲んでの集合写真

マレーシア／PM M&M Arc Sdn Bhd 11月11日(金) 食・フードビジネスチーム

多民族だからこそ”可能性が広がるマレーシアで奮闘する日系外食企業を視察。

食・フードビジネスチームでは、マレーシアで外食産業を展開しているM&M Arc Sdn Bhd（日本の株式会社ROIの現地法人）を訪問した。M&M Arc Sdn Bhdでは、レンタルオフィスを始めとする不動産業の他にも、人材紹介業やWEB開発まで多岐にわたる事業へ展開している。その中で今回私たちが詳しく話を聞いたのが、外食事業である。外食事業として現在行っているのは、飲食店「織部」「赤から」の経営とハラルナビのアプリ開発やQUOUZEのサイト運営などである。

マレーシアの外食産業の現状としては、国民の平均所得の増加に伴い、旅行や食事等に対する支出が増加しており、今後の産業拡大に対する期待は大きいという。しかしながら、ハラル対応や多民族への対応が困難なため、他のASEAN諸国と比べて日系外食産業の進出が少ない。

そんな中、現在M&Mは、高級寿司店「織部」と名古屋が発祥の居酒屋「赤から」を経営し、好調な売上を維持している。現地法人責任者の鈴木裕也様は、マレーシアで外食事業を展開するにあたってマーケットをどう読むかが最も重要であるとおっしゃっていた。マレーシアの特色は多民族であり、マレーシアの中に、マレー人、華人、インド人、カダザン人、イバン人が在住していることから、それぞれ住む地域や利用する飲食店も違うそうだ。例えば、マレー系のムスリムなら、ハラル対応をしている飲食店しか利用できない。対象とする顧客層により、料理の内容や味付け、料理の見せ方、お店の雰囲気全てが異なる。「織部」は、近年増加しているマレーシアの富裕層をターゲットとして、価格設定を高くしてでも本物の日本の味を提供することにこだわっていた。食材になる魚介類は全て日本（築地や福岡）から輸入することや、板前がカウンターの目の前で寿司を握り、そのネタについて英語で詳しく説明するなど、非日常の空間を提供するためにエンターテイメント性に優れた数々の工夫をしているそうだ。

また、板前と同様に「織部」独特の雰囲気を提供するために人材確保や育成にも力を入れているそうだ。「織部」では、面接をした後に２日間実際に働いてもらった後に採用しているという。一定の空間を提供し続けるためにはレベルの高い人材を育成する必要がある。そういった一つ一つのこだわりが、「織部」のブランドを高めているのではないかと感じた。

そしてつい２ヶ月前にオープンした「赤から」でも、同様の工夫が見られた。赤からでは、約２万５千人いる日本人移住者をターゲットとして、日本人向けの味を提供しているが、現地の顧客も多く、今後はハラル対応を検討しているようだ。

マレーシアでは多種多様に外食事業を展開することができる。世界中から質の高い健康食と評価をいただける日本の和食は、今後さらにマレーシア進出を目指して欲しいと感じた。しかし、マレーシアで展開しようとすれば、どんな顧客を対象とするのかが重要となる。まだまだ、日系外食産業の進出が少ないマレーシアにはビジネスチャンスがたくさん転がっているが、まだ文化として根付いていない分野では、まずそれを文化として根づけていく必要がある。躍動するアジアにおいて、外食事業の市場が拡大しているマレーシア全体での外食事業はますます充実していくだろうと思う。今後、海外へ外食事業を展開するためには、他国の食事情を理解した上で日本のブランド力を高めるための試行錯誤した戦略が必要になっていくと感じた。

（文責：安永麻紀）

入居するビルの一階。豪華なロビーで記念撮影

M&Mのレンタルオフィスでの講義の様子

貴重なレクチャーを頂いた
鈴木裕也さま。
有難うございました！

マレーシア／夜　夕食交流会　11月11日(金)

現地で活躍されている日本とマレーシア双方の方々や地元の大学生をお招きし、想像以上に盛り上がった。

現地で活躍されている日本とマレーシア双方の方々や地元の大学生など、約40名の方々にお越しいただき、夕食交流会を開催した。当日は、外食や不動産、レンタルオフィスなどのビジネスを手掛けている日系企業の現地法人M&M Arc Sdnでの視察を終えた後、会場に約1時間の余裕をもって到着し、段取りや役割分担の確認を進め、特に団員紹介とウェルカム・スピーチのリハーサルは入念に行った。

関団長から開会挨拶と福岡県人会会長の藤木雅聰(ふじきまさたか)様から乾杯挨拶を頂いていよいよ交流会が始まると、団員も最初は緊張気味だったが、それぞれゲストの方々との話を楽しんでいた。緊張がほぐれたところで、団員紹介が1人ずつ行われ、各々が趣味等について簡単なパフォーマンスを披露し、その後、団員を代表して井上さんが英語による心のこもったウェルカム・スピーチを行った。交流会は非常に盛り上がり、団員それぞれが現地で活躍されている日本とマレーシア双方の方々や地元の大学生と交流を深めることが出来た。たとえ英語が堪能でなくても、現地の学生に積極的に英語で話しかけていた。

私自身も、現地の学生からマレーシアの文化や習慣について聞きマレーシアに対する理解を深めると共に、日本の気候や制度についても話をすることで交流を深めた。中には、私自身と同じ大学で学んだ経験のある学生もいて、ここでも福岡とのつながりを感じることが出来た。また、現地で活躍されている日本人の方々からは、現在取り組まれている事業やマレーシアの現状等、貴重なお話を聞くことが出来、非常に有意義だった。私もその姿を見て、福岡やアジアの発展に貢献できるよう努めなければならないと強く感じている。

2時間という時間はあっという間に過ぎ去り、在マレーシア日本国大使館二等書記官の兼松幸一郎(かねまつこういちろう)様から閉会挨拶を頂いて交流会が終わった後も、会場にいる人たちはまだ話し足りない様子で、最後に名刺や連絡先を交換したり、一緒に写真を撮ったりしていた。SNSの発達により、連絡先を交換していれば今後も交流を深めることが可能である。現地の学生とは、福岡またはマレーシアで「また会おう」と約束をした。交流会で出会うことが出来た方々との縁を大切にしていきたい。この交流会を通じて、普段はあまりお会いする機会のない方々から様々な話を伺い、交流を深めることが出来、非常に貴重な経験となった。

最後になりますが、ご多忙の中、夕食交流会に参加して頂いた皆様に深く感謝申し上げます。誠に有難うございました。

（文責：平川祐太）

ゲストの方々との記念撮影。忘れられない夜になりました！

夕食を交えながら交流を楽しみました

夕食交流会に参加してくださった皆様との集合写真

マレーシア／マレーシア市内視察・福岡へ帰国・・・そして新たなスタートへ　11月12日(土)

マレーシアの日常の姿を目にし、その中に展開する日本商品のエネルギーを感じながら帰国の途についた。

最終日は、歴史と近代が混在するクアラルンプール市内を視察した。はじめに、イギリスからの独立が宣言された歴史的な場所である、独立広場を視察した。周辺にも植民地時代の歴史的な建造物が多く、マレーシアの歴史を感じさせる場所であった。

KL中央駅からセントラルマーケットに向かうため、LRT Rapid KL（高架鉄道）に乗車した。LRTについて何より特筆すべきは、駅に時刻表や発車時刻の案内がないことだ。数分間隔で運行されていることもあり、そのうちに来るのであれば必要がないと考えられているそうだ。立ち並ぶ高層ビルや景色を楽しめることから観光客にも人気の理由が伺える。大きな混雑が見られるが、車両を増やすには高架の強度などの課題があるとのことだった。

セントラルマーケットでは、観光客向けに簡単な日本語を覚えている人が多く見られた。また商品のPOPにも日本語が使われており、日本人観光客が多いのだろうと思われた。

今回の海外研修最後の昼食でマレー料理を堪能した後、大型商業施設パビリオンの6階、東京ストリートを視察した。提灯や木の店構えが日本の商店街のような雰囲気を演出していた。山梨県の常設店舗「富士の国やまなし館KL」は日本の地方自治体としては初めて、県産品の販売や観光情報を発信するアンテナショップとして作られたとのこと。地方の商品を幅広くPRできる可能性を感じた。

もう一つの大型商業施設LOT10に10月末にオープンしたばかりの、クールジャパン機構と共同出資で「日本の魅力」を表現するISETAN The Japan Storeを視察した。今後日本企業が海外展開をする際のノウハウの共有やサポートにつながる事業である。中でも、洋菓子店であるアンリ・シャンパルティエのカフェが売り場に併設されていたことには驚いた。後日、伊勢丹セールスマネージャーの兒玉浩二様に伺ったところ、日本の菓子文化の伝統である和菓子だけではなく、独自の進化を遂げた洋菓子を両軸で伝えたいという思いがあると教えて頂いた。

クアラルンプール最大級の広さを誇るミッドバレーモールにあるAEONでは、ヤクルト等日本の商品にもハラルマークが見られた。マレーシアの日常を視察し、たくさんの日本商品に出会った。日本製は多少高くてもとても支持されていると感じた。

行政機関を集中させた新しいエリアのプトラジャヤに移動し、首相官邸やプトラ・モスクを視察した。海外研修がいよいよ終わってしまうという、切なくなるような美しさがあった。中華料理の夕食をとり、名残惜しさが溢れる中、いよいよ帰国の途についた。復路は夜から朝にかけてのフライトということもあり、暗く静かな出発だった。始めは思い思いに今回の海外研修を振り返っていた私達も、積もり積もった疲れもあったのか、いつしか静かな眠りについていた。長いようで短い旅の幕をそっと閉じるような静かな機内だった。しかし、私にはこの静かなフライトが、私たちの新たな出発を描いているように感じられた。機内から見た朝日はまさにその象徴だった。日常から外に飛び出し、ミャンマー・マレーシアでたくさんの出会いを経験した一週間。福岡空港に降り立った瞬間の日本の寒さに、ついに帰国したと実感しながら、これからも続く研修や今後の活動に臨もうという皆の顔がまぶしく頼もしく感じられた。

（文責：井上愛）

独立広場の周囲は歴史ある建物と近代が入り混じる

KLセントラル駅は日曜も混雑している

ISETANで販売されている
久留米の酒造の胡麻焼酎。

福岡のめんべいも紹介されている。地域限定商品はまだない

パビリオンの東京ストリート内。左手前がやまなし館。
地域の特産品を扱う

第5次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
2016年12月3日（土）、4日（日）

帰国後の宿泊研修。循環社会や人権同和、経営者目線の人材育成について学ぶとともに研修成果発表を行い、今後のフィールドワーク企画や報告書のアイデアを練った。

研修一日目、NPO法人 循環生活研究所たいら由以子様からコンポストを始めとした研究所の活動や、循環をテーマにご講話いただいた。最初に昔と今の自然環境、暮らしの違いをみんなで考えた。生活は便利になったけれど、昔の方が自然環境はもちろん、人と人との繋がりも豊かだったと感じた。たいら様が、人との関わり方を大切に、組織を組み立て、様々なイベントや活動をされていることが伝わってきた。人と人との循環、コンポストを介した物の循環、そんな小さな循環を中心としたまちづくりは、人との関係が希薄になっている日本社会に必要なのではないかと感じた。

人権・同和研修では、ジャーナリスト（元西日本新聞記者）馬場周一郎様から現代の様々な人権問題についてご講話いただいた。高齢者の人権が問題になっているが、日本では平均寿命の伸びが心の豊かさに比例しているのか？という、馬場様の問いには考えさせられるものがあった。また、私たちが当たり前に使っているスマートフォン、その影では鉱物を争って大虐殺が繰り返されていること、また未だに少女売買が行われていることなど、世界では私達の知らない人権問題がたくさんあると感じた。

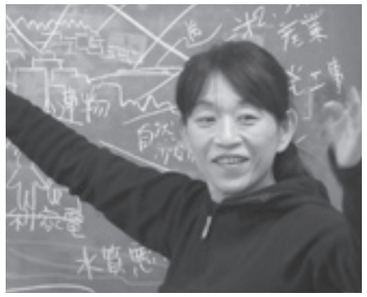
海外研修テーマ別発表では、観光、フードビジネス、人材育成・教育それぞれのチームが視察先での成果発表を行った。第二次研修のフィールドワークと絡めた日本とミャンマー、マレーシアとの比較など、様々な視点から研修内容を振り返っていて、海外研修で学んだことをより深めることができた。

『人を育て、事業を育て、地域で活躍する』として、アトモスダイニング株式会社 山口洋様に、経営の中で非常に大切にしている、人材の育成についてご講話いただいた。お客様に直接接するアルバイト、そしてアルバイトを指導する立場の社員、みんなが意識を高く持って仕事ができるようにと、様々な研修やコンテストをされていた。リクルート勉強会として、アルバイトの就活支援までされていることにとても驚いた。社員を大切にする、それがお客様を大切にすることに繋がる、という経営方針は労働環境を良好に保つために必要だと思った。また、アルバイトや社員が夢を持てるようにする、成長の場となるような職場作りをされていることが伝わってきた。

研修二日目は、各テーマのチームに分かれて第6次研修のフィールドワークの企画を行った。今までの研修で学んだこと、感じたことを活かし、よりよい研修に出来るよう、みんなで意見を出し合い各班とも面白い企画ができたと感じた。

そして、報告書・報告会の企画検討も行った。今までの研修の報告書の添削をしあったり、添付する写真を選んだり、団員みんなで協力して和気あいあいと活動することができた。この研修を通して、互いに切磋琢磨しあえる仲間がたくさんできたと感じた。

（文責：村上恭子）


たいら由以子様の講義。第2回青年の翼OGでもあります

研修成果について堂々とプレゼンを行う団員

如何に社員のモチベーションを上げるのか？熱く語って頂いた山口様

講義名	講師
「小さな循環でいい暮らしをしよう」	たいら由以子 NPO法人循環生活研究所　理事長 （第2回福岡県青年の翼OG）
人権・同和研修	馬場　周一郎 ジャーナリスト（元西日本新聞記者）
「人を育て、事業を育て、地域で活躍する」	山口　洋 アトモスダイニング株式会社　代表

報告書の編集作業中の団員。

副知事表敬

於：福岡県庁
2016年12月21日（水）

大曲昭恵副知事を表敬訪問。福岡県グローバル青年の翼での学びを報告し、今後への決意を新たにした。

12月21日水曜日、福岡県グローバル青年の翼団員12名で福岡県大曲昭恵副知事を表敬訪問した。

表敬式では、団員それぞれが自己紹介を行い、団員代表で友野葉月さんが挨拶を行った。友野さんは、海外研修の内容について報告し、「それぞれの国における産業や文化、企業活動・社会貢献活動などの各分野とその根底にある歴史や人々の考え方、価値観などを学び、国際的な視野を身に着け、自分自身の活動の幅を広げる機会となりました。この貴重な経験を活かし、地域で活躍する人材となるよう精一杯努力します。」と決意を表明した。その上で、青年の翼に参加できたことへの感謝の気持ちを述べた。

大曲副知事から、第５次研修まで終えたことに対して、ねぎらいの言葉をいただいた。また海外研修について、「海外旅行や留学では得られない経験をされ、色々な刺激を受けたと思います。海外事情を知り、また日本国内の企業や海外で活躍している日本企業のこと、さらに日本の習慣や社会貢献等もより深く学んでいただけたと思います。今回の経験を多くの方に伝え、地域に還元していただければと思います。」と今後の活躍に期待を込めたメッセージをいただいた。

その後のフリートークでは、海外研修をはじめ、第１次研修から第５次研修で学んだことや考えたこと、海外生活で感じたこと、今後の決意などについて大曲副知事と団員で意見交換を行った。

団員の山之内玲奈さんは、教育の視点から「日本は、学歴を得るために学ぶことを手段にしている部分があると思います。一方で、ミャンマーでは、地域に貢献するために勉強しているという若者が多く、自分の将来像を描きながら、目をキラキラさせて学んでいる姿が印象に残りました。」と日本とミャンマーにおける若者の学ぶ姿勢の相違について意見を述べた。

表敬訪問で大曲副知事から激励の言葉をいただき、研修終了後も、地域社会に貢献するとともに、海外情勢に興味を持ちつつ、日本についても理解を深め、自分自身、向上心を持って成長していきたいとあらためて決意した。

（文責：水田智子）

表敬前の一コマ。緊張ほぐしてます！

団員代表で堂々と挨拶をする友野葉月さん

大曲副知事を囲んで集合写真

大曲副知事による激励の挨拶

第６次研修（事後フィールドワーク）

「モデルコースを手段とした観光ニーズのリサーチ」
於：博多の町屋モデルコース
2017年1月22日(日)

観光・インバウンドチーム

博多の町屋モデルコースの散策に参加した外国人のニーズをリサーチし、観光プロモーションのあり方を考察した。

海外研修でマレーシア政府観光局を視察した際に、世界中から観光客を呼び込むために、各国・各地域のニーズをリサーチし、それに対応するようなポイントを絞ったプロモーションが行われていることを学んだ。

こうした取り組みも、福岡の観光を更に振興していくうえでとても重要だと考えた私たちは、外国人の観光に対するニーズを把握することを目的として、福岡在住の外国人留学生とともに博多地区の観光名所を巡り、意見交換を行うことを企画・実施した。「博多ガイドの会」の入江様、久保様にモデルコースをご提案頂き、お二方のガイドのもと、参加してくれた韓国・台湾・ネパールからの留学らとともに、博多地区の寺社を巡った。

観光後、留学生に感想や意見を伺ったところ、今回のモデルコースついては非常に好評であった。「3 時間という短時間で、楽しみながら歴史や文化を学ぶことができた」「博多はアクセスが良好であるため、来福後、気軽に観光できる点が良い」「外国人の友達にも是非お勧めしたい」という声も多かった。また、ネパール出身の留学生は、特に宗教への関心が強いようで、寺社に関するガイドの説明に興味津々の様子であった。

留学生に最も人気だったのは、東長寺の「地獄極楽巡り」である。これは東長寺にある福岡大仏の台座内を巡るもので、様々な地獄の絵を見た後、暗闇を抜けると極楽があるという流れになっている。時間としては数分という短いものだったが、真っ暗闇を壁伝いに歩くというスリルがあり、最も楽しかったと話していた。

一方で、今後の参考となる意見も多くいただいた。一つは、情報の多言語化である。「ガイドの説明は分かりやすかったが、聞きなれない単語もあり、理解するのに時間がかかった」「内容を補足する解説書やパンフレット等があると分かりやすい」「現地にある案内看板も、英語だけでなく、中国語や韓国語など多言語対応してほしい」といった内容だ。また、「良いツアーだが、ガイドをどこで申し込めばよいのか分からない。もっとPRしていくべき」との声も聞かれ、情報の発信の仕方にも課題があることが分かった。その他、「寺社で参拝をする時間がもっとほしい」「お土産も見てみたい」などの要望もあった。

今回の活動を通して新たな発見や再確認した事がたくさんあった。まず、「地獄極楽巡 り」のような体験型の観光コンテンツは、短時間でも外国人観光客を楽しませることができるという点である。これは、第2

次研修で学んだことの一つであるが、それを実際に肌で感じることができた。また、外国人観光客が体験型ツアーなどを見つけやすいよう、情報の発信の仕方も工夫すること、さらに多言語対応を進めていくことが重要だと分かった。

相手のニーズを知ろうとすることで、見えてなかった課題だけでなく、今まで私たちが気づかなかった福岡の良いところも、たくさん見えてきた。これを新たなプロモーション へとつなげていくことで、福岡により多くの外国人観光客が訪れ、今後益々の発展が見込めるのではないか。私たちも、これまで学んだことを生かし、その発展に寄与できるよう努めていきたい。

（文責：窪田まりか、小柳賢史、石田佳奈子）

博多駅でツアーの概要を聞く団員達と外国人留学生

承天寺にて博多山笠の起源について説明を受ける。留学生らも積極的に質問していた。

ガイドの久保様による仏像の説明。団員も留学生も熱心に耳を傾けていた。

承天寺の縁側にて。枯山水の鑑賞や座禅体験を通して、改めて日本の文化を感じた一行

第６次研修（事後フィールドワーク）

「LET'S HALAL LIFE」
於：アン　ヌール　イスラム文化センター（モスク）
福岡マスジド(福岡市東区箱崎)　2017年1月22日(日)

食・フードビジネスチーム

異文化（ハラル）を理解するため、福岡在住のムスリムの方との交流会を開催して、真の情報を得ることの重要性を痛感した。

我々食・フードビジネスチームは、マレーシアと日本の食文化を比較する中でも、特に異なる部分の大きいハラールに焦点を当ててこれまで活動を行ってきた。

ハラールとはイスラム教において「許されたもの」という意味であり、今回はイスラム教のことやムスリムの食文化について学ぶとともに、我々以外の多くの人にも知ってもらう機会を設けたいと思い、福岡マスジドにご協力を頂いて、ハラル・フードのランチ会とイスラム教の概要を理解するための講義を企画させていただいた。ランチ会ではハラールに基づいたエジプト料理（注：エジプトはイスラム国家）が振舞われ、講義ではイスラム教の概要やハラールの内容についての説明が行われた。

大学生から社会人までの16名の方に参加いただいたが、ほとんどの方が参加する前はイスラム教について良いイメージを持っていなかった。メディアによって誇張された一部の良くないイメージが一人歩きしているのだと感じた。ハラールという言葉もあまり認知されておらず、参加者全体に共通していたことは、「イスラム教は厳格なルールで縛られていて怖い」というものだった。しかしながら、ランチ会や講義で直接ムスリムの方と交流する中で、それが間違いだと理解するきっかけを作ることができたのではないかと思う。

イベントの後半では福岡マスジドの方のご好意で、民族衣装の試着体験をさせていただいた。すでにムスリムの方と参加者は打ち解けていて、皆笑顔がこぼれていた。

福岡マスジドの方からは「君たちが興味を持ってくれて、実際にここへ来てくれたことだけで本当に嬉しい」とおっしゃっていただき、参加者からは「普段の生活やインターネットでは体験できない、彼らの生の声を聞くことができ貴重な経験ができた」「もっと知りたくなった」など好評の声が寄せられた。

ムスリムは増え続けており、2020年に世界人口の1/4を占めると言われている。我々日本人はイスラム教・ムスリム、と聞くと反射的に負のイメージを持ってしまうが、ほとんどのムスリムは平和を愛し、テロリズムの思想には反対しているという事実や、戒律が厳しいようにみえるが、実はほとんどの食べ物がハラールで、禁止されているものは少しだという事実を我々は知らない。

ムスリムの方にとってハラールという概念は重要でその情報を検索できるモバイル・アプリも開発されているそうだ。今回の企画を通じて、グローバル化が様々な場所で叫ばれている今だからこそ、我々はメディアに踊らされることなく真の情報を伝えていかなくてはいけないと深く感じ、また、ビジネスにおいてもそうした真の情報を得ることの重要性を痛感することができた。

今後、食のグローバル化に対応するためにも異文化理解の場の提供やハラール認知度の向上が必要になってくると思う。来日するムスリムの増加や拡大するマーケットに対応できるような、異文化や

ハラールを理解して交流やビジネスの促進に貢献できる人材になりたいと感じた。

（文責：十時直大）

ドキドキの衣装試着体験

初めて聞く情報もたくさん

ハラールの肉料理

女性メンバー、ヒジャブを纏ってハイチーズ。

男性メンバー、民族衣装でハイチーズ。

第６次研修（事後フィールドワーク）

「子どもたちと留学生のクリスマス交流会in添田町」
於：添田町
2016年12月23日（金）

人材育成・教育チーム

英語に触れて英語で遊ぼう！積極的な子どもを増やすために必要なのは何か？活動しながら考察した。

海外研修で私たち人材育成・教育チームは、OISCAミャンマー研修センター周辺の小さな小学校とマレーシアの華人系小学校を訪問し、日本との教育の違いを感じました。日本の教育現場に足りないものは、実用的な英語教育、積極的な子どもを増やすための教育、早いうちから海外の同年代の人と交流する機会を得るための教育、先生と生徒の意思疎通がきちんとできる良好な関係を築く教育の四つの点が挙げられると考察しました。

そこで私たちは第6次研修の目標を“日本の教育現場に必要なものを再考する機会を得る”とし、企画を練った結果、添田町のバスケットボールクラブに、自分たちが考えた内容で楽しく英語に触れるフィールドワークを行いました。子どもたちがネイティブの英語に触れることができるように、九州大学の留学生を招き、三つの活動をしました。

はじめはアイスブレイクでじゃんけん列車をしました。緊張していた子どもたち、留学生ともに笑顔が溢れ、和やかな雰囲気でした。次に、英語で名刺交換をする活動をしました。「人と仲良くなるきっかけはまずは自己紹介！」ということで、自分たちで名刺をつくり、グループに分かれて留学生と名刺交換を行いました。自分の名前、好きな食べ物を英語で話すことに挑戦しました。低学年の子どもたちには少し難しいかなと思いましたが、高学年の子どもたちが教えてあげている姿が見られました。

最後に英単語かるたをしました。子どもたちは遊び感覚で英単語を学び、また留学生には日本文化に触れてほしかったためこの活動を行いました。ゲームということで子どもたちにとって取り組みやすく、各グループとても盛り上がっていました。

第6次研修を行った日がクリスマス・イブ前日ということで、メンバーと留学生でサンタクロースやトナカイになって、子どもたちにサプライズをしました。笑顔でプレゼントを受けっとってくれたので嬉しかったです。

子どもたちは、はじめは英語を話すことにためらいや恥ずかしさがあるようでした。積極的な子どもを増やすためには、教育者側が子どもたちの安心できる環境をつくることが必要だなと感じました。また、今日では小学校での英語の教科化が問題になっています。まずは英語に慣れ親しみ子どもたちが英語に興味・関心を持てる活動を行っていくべきだと感じました。

（文責：山之内玲奈）

おてつき厳禁！カルタは真剣勝負です

じゃんけん列車　だんだん長い列になってきました

サンタさんとトナカイと…ツリー!?

みんなで集合「ハイチーズ」

団員レポート

1班
井上　愛
井口　由貴
井本　大輔
窪田まりか
末松　大和
友野　葉月

2班
石田佳奈子
立石創太郎
靏久　拓磨
十時　直大
原　学哉
松尾　薫
村上　恭子
山之内玲奈

3班
河野　泰士
小柳　賢史
橘　里佳子
中村　天音
濱口　結衣
平川　祐太
水田　智子
安永　麻紀

新たな価値観との出会いを提供する人材として、活動の幅を広げたい

井上　愛
宗像市役所教育子ども部子ども家庭課
Global Wings 1班

私が以前働いていた旅行会社から宗像市役所職員へと転職を決めたのは、旅という手段を通じて、企画から深く携わり、現場で人に寄り添った働き方をしたいと考えたからです。

そんな私が「福岡県グローバル青年の翼」に応募した理由は２つあります。１つは、市を志望したきっかけである、国際交流事業や観光事業における感性を磨くことです。もう１つは、目まぐるしい成長を遂げるアジア圏で活躍されている方々の想いから学び、１人の人材としての資質を磨くことです。

研修を振り返ると、海外に10カ国以上行った私にとっても、驚きとの出会いの連続でした。マレーシア政府観光局では、インバウンドのプロモーションの考え方が日本と異なることも驚きの１つでした。

国際交流の場では、ミャンマーのオイスカ研修生達が目を輝かせ学び、夢を語る姿に考えさせられました。マレーシアでは、異文化を受け入れ相手を尊重する教育現場に、国の歴史が造る環境こそが個性であると感じました。

また、ISETAN　The Japan Storeで様々な商品を目にし、アジアの成長やビジネスチャンスを、日本の地方にいかに取り込むのか、行政職員の役割や可能性について考えるきっかけとなりました。

海外で活躍する福岡の公務員の方々にもご縁がありました。タイで福岡方式の廃棄物処分場の整備を支援されている福岡県の浜様、ヤンゴンの水道事業のアドバイザーをされている福岡市の渡辺様のお話には、同じ公務員として多くの刺激を受けました。

「国内の講義で十分ではないか。」というご意見もあるかもしれません。しかしながら、私はこの研修を通じて改めて、「日本という日常から外に出て、直接得た気付きが、自分の思考や言動に新たな提案を与えてくれる」と自分の肌で感じました。単なる海外旅行や、ボランティアへの参加では限界があります。日本や福岡、自分を知り、歴史・文化・県内企業の海外展開や国際貢献を学ぶ事前研修はとても重要で、私たちの受容力を育てるインプットが、いかに海外での吸収力やアウトプットを向上させるかを体感しました。また、参加者の皆さんとの関わりの中でも、自分と異なる感性に刺激を受けました。

この事業に参加した今、私の人生観に新たなエッセンスが加わりました。それは「新たな価値観との出会いを『次の世代』に提供できる人材になろう。」という思いです。外の世界には新たな気づきや可能性が無限に広がっています。「袖振り合うも多生の縁」とは言いますが、そもそも外に出るという因を踏まなければ、多くの縁を逃がすことになります。

最後になりましたが、私共のために、国内外の多くの方々に熱い思いのこもった講義や、充実した視察をご用意いただきました。皆様からのメッセージを胸にこれから生きていくことを大変光栄に思います。また、次の世代に、視野を広げる重要性を伝えることができる人材となるよう、尽力いたします。ありがとうございました。

貧しく過酷な境遇から努力を重ねて成功したマレーシアの華人起業家や、ミャンマーとマレーシアで出会った青年たちに学んだこと

井口　由貴
九州大学　21世紀プログラム１年
Global Wings 1班

私は将来、福岡でNPO法人を立ち上げ、女性の雇用環境を改善したいと考えている。自分の将来に関して何か得られるものがあればと思い、「福岡県グローバル青年の翼」事業に応募した。その結果、この研修を通して得られたものは当初の想像をはるかに超え、中でもビジネスにおける「福岡都市部の強み」と、「起業家精神（アントレプレナーシップ）」について深く学べたことはとても貴重な経験だった。

まず、国内研修のビジネスデザインラボ代表の神田橋さんの講義で「福岡の強みは都市部がコンパクトであること、若者が多く人材に溢れていること、そして質の良い会社が多いこと」であること学んだ。「福岡では創業支援の新たな展開が始まっている」というお話もあり、このような動きがもっと活発になることを期待するとともに、福岡で起業したいという気持ちがますます強くなった。

また、私が海外研修で１番刺激を受けたのは、RG Fibre Industries SDN. BHD.の創業者のRemenさんとのトークセッションである。Remenさんがご自身の体験を踏まえ、起業の際のポイント、起業家としての覚悟、成功の秘訣を熱心に教えてくださり、その中で何度も強調されていたPASSIONという言葉からRemenさんの仕事にかける情熱を感じた。また、その後の夕食交流会でRemenさんと再度お話しする機会をいただいた際にも、自分の信念を曲げないことが重要だと話してくださるその姿や人柄に強く惹かれ、彼のような人になりたいと何度も思った。マレーシアと日本では、国政や文化、環境など様々な違いにより、直面する課題もそれぞれ異なるだろう。しかし、そんな中でも起業家として根底にあるべきものは共通しており、それがPASSION、情熱なのだと強く思った。

そしてまた、ミャンマーやマレーシアで出会った同世代の青年たちとの出会いも貴重な経験となった。特に、ミャンマーで出会ったOISCA研修生の女の子はお金を貯めて日本に行くことを夢見て、現在、勉強を頑張っていると教えてくれた。私は、夢の実現に向けて日々頑張る彼女を見て、自分も負けてはいられないという気持ちになり、また、これから自分も頑張ろうと気持ちを新たにすることができた。日本を飛び出して初めて、日頃自分がどれほど豊かな暮らしをしているかを実感し、だからこそ今回出会った青年たちに負けないように、私は日本で自分のやるべきことを精一杯やろうと決意した。

将来、彼女が日本に来た時には、私もいい報告ができるように成長した姿を見せたい…ここからが始まりだと強く感じた「福岡県グローバル青年の翼」の日々だった。

新たな一歩を踏み出す

井本　大輔
株式会社正興電機製作所　環境システム営業部公共営業第1グループ
Global Wings 1班

何か新しいことにチャレンジしたいと思っていた矢先、「福岡県グローバル青年の翼」を会社から紹介してもらい、興味を持ちました。さらには弊社が東南アジアでのビジネス拡大に力を入れており、私も躍動するアジアの市場をこの肌で感じたいと思い応募を決意しました。

国内の研修ではマレーシア、ミャンマーの文化や歴史についての学習ができ、現地を訪問した際にとても役立ちました。また海外で仕事をされている方の実体験に基づくお話は大変貴重で、今後の参考になりました。私は今まで東南アジア諸国には無知であり、発展途上国というイメージしかありませんでした。

しかし海外研修で現地を訪れてそのイメージが一変しました。特にマレーシアの首都クアラルンプールの発展には目を見張るものがありました。建設中のビルやマンションがいくつもあり、その街並みは福岡をはるかに超えて発展していました。視察した華人系の小学校では、驚くことに子供達が多言語学習をしており、幼少期から多様な言語や文化に触れ、国際的な視野広げることができる環境は羨ましく感じました。

ミャンマーは非常に熱気と活気にあふれた国でした。オイスカ研修センターのある内陸部のパコックを訪れた際、牛車が動いていたりヤギの群れがいたりする中で、ほとんどの人がスマートフォンを使用していることに驚きました。ほとんどインフラも整備されていない中で新しい文化が共存しているギャップが興味深かったです。新しい文化の急速な流入によりどのような発展・成長を遂げるのか今後が楽しみになりました。

ヤンゴンで夕食を共にした、ヤンゴン市水道局へ福岡市水道局から出向中の渡辺桂三さんが、「ヤンゴンでは、そもそも水道水を飲めるようにする必要があるのか？といった根本的なことを考えることからが仕事です」と仰っていました。日本的な常識が通用しない、途上国で働くことの難しさを教えていただきました。

今回の研修を通じて、普段の生活では触れることのない内容を学び、考えることができました。改めて日本について考える機会にもなり、日本人の真面目さや正確な仕事ぶりに誇りを感じました。海外の方と交流したり、英語でのスピーチをしたりする経験をしたことで、より自分に自信が持てるようになりました。このプログラムに参加しなかったら、おそらく一生経験することのないことを経験できました。インターネットに情報が溢れる時代ですが、実際に現地に足を運んで理解することの重要性を感じました。今の職場でこの経験をアウトプットし、新たな視点を持って行動することが楽しみです。今後は皆を引っ張っていけるような人材を目指し尽力していきたいと思います。

自分は小さな存在だけど、諦めずに全力で取り組むことができる大人になりたい

窪田　まりか
福岡女学院大学国際キャリア学部国際キャリア学科　１年
Global Wings 1班

日本とは違うアジアの国々を実際に見て、肌で感じたい―。これまで、様々な方から途上国についてのお話を伺う機会が多かったので、将来は観光という視点から、途上国の発展に貢献したいと思っていました。しかし、実際にその国にいってみなければすべてを知ることはできない、現地でしか感じることができないものがあるはずだ、その思いが強くなり、今回の「福岡県グローバル青年の翼」に応募しました。

研修が始まる前は、ミャンマーやマレーシアの、日本とは異なる部分を感じたい、観光への取り組みを学びたいとばかり思っていました。しかし実際に９月に国内研修が始まって、郷土の歴史や県内企業の海外展開、国際貢献など様々な分野の講義を受けることで、興味の幅はどんどん広がっていきました。

特に興味を持ったのが、日本人の先輩方が海外で行っている国際的な貢献活動です。ミャンマーのオイスカ研修所では、日本人が現地の若者に日本の農業技術を教えており、ミャンマーの農業技術や人材育成のために尽力されています。ミャンマーのヤンゴンでは、現地で長年コンサルティング会社を経営されている西垣充さんが、視覚障害者支援のためのマッサージ店を運営されており、視覚障害者の自立支援や社会的地位向上に取り組まれていました。ミャンマーで日本人の先輩方がこうした取り組みを行っていることは、実際に現地を訪れなければ知ることはなかったと思います。

そのマッサージ店を訪れたとき、視覚障害者のマッサージ師６名ほどとお話をさせて頂いたのですが、みなさん今のマッサージ師という仕事に就けて幸せだとおっしゃっていました。何不自由なく生活をしている私たちは幸せであることを忘れていたのかもしれない、と思うと同時に、視覚障害者に仕事と誇りを与え、幸せだと感じさせるような事業を実施している西垣さんのような尊敬すべき人になりたいと思いました。まだまだ発展が進まないミャンマーで、同じ日本人がこうした取り組みを行っていることを心から誇りに思いました。

この研修に参加したことで、多くのことを学び、目で見て耳で聞いたことで、改めて世界の広さや自分の存在の小ささを感じました。今すぐ日本を飛び出して行動することはできません。しかし、この研修で学んだことを忘れず、まずは故郷福岡をよりよくするために色々なことを考え、様々な分野に取り組みたいです。そして近い将来、困っている誰かが幸せだと感じることができるような、国を超えた活動に、諦めず全力で取り組む大人になりたいと思います。

これからも様々な経験を通して自分の視野を広げていきたい

末松　大和
九州産業大学　商学部商学科　３年
Global Wings 1 班

海外の文化や現地の生活を体感することで自分の視野を広げたい。そしてこの研修を通して、これまでの自分にはない考えを身に着けたい。そう考え、この「福岡県グローバル青年の翼」に応募した。この研修に参加したことで普段関わることのない方々の貴重なお話を聞くことができ、非常に勉強になった。

第１研修から第３次研修までを通して、今回の視察国であるミャンマー、マレーシアの生活や経済について学んだ。この研修に参加することが決まってから、事前に自分なりに視察国について勉強していたが、講師の方々のお話を聞き、団員とグループワークをすることで、より知識を深めることができた。特に北九州市立大学准教授篠崎香織様のお話が印象に残っている。篠崎様より「マレーシアの歴史・人種・宗教について」講義をして頂き、１時間半という短い時間でマレーシアについて多くの情報を得ることができた。そして、この講義でインプットしたことを現地で生かしたいと思った。また、自分が日本人として現地でどのように振る舞うべきなのか考えさせられた。

海外研修で印象に残っているのはヤンゴンでの夕食交流会である。J-SATコンサルティング代表取締役の西垣充様とお話をさせていただき、そのとき西垣様がおっしゃった「日本のブランドはもうない。」という言葉にとても驚いた。その言葉を聞くまで私は「日本の技術はすごい」「海外の人々も日本の力を認めている」と思っていた。

しかし、ミャンマーの家電製品でいえば中国製品のほうが主流で日本製のモノは使われてないのだそうだ。そして最後に「日本国内にいるだけでは今のこの世界の現状を知ることができない。」とおっしゃっていた。間違いないと思った。日本ではできない体験をしたい、自分が知らない世界の現状を学びたいと思いこの研修に参加したことをこのとき改めて認識させられた。

また、海外研修の毎日は非常に刺激的な日々であった。ミャンマーのマーケットで山積みにされた魚や肉。ミャンマーのOISCA研修センターで研修を受けている若者たちの自分の村の農業をより発展させるために一生懸命に農業のノウハウを学ぶ姿。恵まれた環境で勉強するクアラルンプールの小学生たち。都市部に立ち並ぶ高層ビル。そのすべてが現地でしか学べないことであった。

そして職種も様々な社会人の方々、大学生といった普段関わることのない人々と同じ団の一員として活動できたことも非常に刺激になった。

今回の福岡県グローバル青年の翼の研修を通して、自分の知らない世界で多くのことを学ぶことができた。この研修で感じた事、学んだことをこれからの学生生活や様々な活動に生かしたい。そして、これからも様々な体験をし、自分の視野を広げていきたい。

自分自身を変えてくれたすべての出会いに感謝

友野　葉月
中村学園大学　教育学部児童幼児教育学科　３年
Global Wings 1 班

私は、現在小学校教諭を目指しています。近い将来教壇に立つ者として、グローバル化が進むこの日本で海外の現状を十分に学べていない私では広い視野に立って子ども達に教えることが出来ない。そう感じこの「福岡県グローバル青年の翼」に応募しました。

第二次研修では、SEVEN SEAS International Schoolを見学させて頂きました。世界に通用する語学力と人格を備えた子どもの育成を理念とし、子ども達が英語で会話する様子を見て日本教育の今後のあり方を考えさせられました。

印象に残ったのは海外研修で訪れたマレーシアでの華人系の小学校でした。まず学校の規模の大きさや児童人数の多さに圧倒されました。授業を見学させて頂くと電子黒板を用いて小学1年生から中国語、英語、マレー語を勉強していることに驚きました。日本では、2020年度の小学5年生から英語教育が教科化され、ICT利活用教育がやっと本格化する予定であるのに、その進んだ教育環境にただ驚愕するばかりでした。ただ、マレーシアでは学歴が非常に重視されていて、どこの大学を出たかによってある程度将来がきまってしまう側面もあるとのことでした。

また、この研修に参加したことをきっかけに、私の曾祖叔父がミャンマーでの戦争で命を落としていることを知り、戦争の悲惨さや平和の尊さを感じました。渡航する前に祖母から曾祖叔父は優しく、日本では奥さんと子どもが帰りを待っていたことなどの話を聞きました。この研修に参加していなければ身内にそういった人物がいるとも知らずに終わっていたかもしれません。ヤンゴン郊外の日本人墓地内にある福岡県ミャンマー戦没者慰霊では団員を代表して献花をさせて頂き、そして慰霊碑を現地の人たちが現在でも綺麗に維持してくださっていて感謝の気持ちで胸が熱くなりました。

今回の研修を通して今までの日常では出会わなかっただろう人との出会いや、様々な経験をさせていただき自分の人生に大きな刺激を受けました。

また、以前の私はグループディスカッション等自分の意見を発表する際、引っ込み事案でなかなか意見が言えませんでしたが今では積極的に自分の主張できるようになったのではないかと感じています。

近い将来、私が教員になった際にこの研修で自分が見たことを子ども達に伝え、幼い時から国際感覚の豊かな子ども達の育成に努めることでアジアの玄関口である福岡とアジア諸国の架け橋となるような人財の育成に貢献していきたいです。

私を変えてくれた半年と海外研修

石田　佳奈子
中村学園大学　流通科学部流通科学科　2年
Global Wings 2 班

私が今回、「福岡県グローバル青年の翼」に応募した理由は、もともとファッションに興味があり、FACo：福岡アジアコレクションのように日本の「POPカルチャー」や「かわいい文化」を福岡から世界に発信したい、更にはファッションだけではなく様々な角度から福岡の魅力を伝えたいと考え、その為の方法を見つけたい―そう思ったからである。

しかし、実際はそう甘くはなかった。9月から始まった国内研修や約一週間の海外研修で現地の人の話を聴き、文化に触れ、同じ格好・食事・寝泊りをするにつれ、自分が無知であった事に気づかされた。

私は、この「福岡県グローバル青年の翼」を通して日本人でありながら、異国の地で改めて日本の素晴らしさや豊かさを感じた。

特に海外研修の経験は、どれも自分自身に貴重なものであったが、一番印象深かったのは、ヤンゴンでの視覚障がい者が働いているマッサージ店GENKYを視察したことである。この店は西垣充さんが、視覚障がい者の自立支援を目的として設立した施設であり、「彼らは生まれつき盲目ではなく、風邪をひき、経済的理由から病院へ行けず、満足な治療を受ける事ができなかった為、病状が悪化し盲目になってしまった。」という話に私は言葉を失った。それと同時に「もし彼らが日本で生まれていたら…」という思いがこみ上がってきた。

また、彼らに仕事で大変な事や嬉しかったことを聞くと、皆口をそろえて、「大変なことは何もない、ただお客様にありがとうと言ってもらえることが一番の喜びである。」と終始笑顔で語ってくれ、私は胸がジーンと熱くなった。

それを聴き私は、上記に述べた目標は、まず、そこに至るまでに解決すべき問題が山ほどある事に気づいた。

例えば、インフラ整備・個人所得の拡大・医療制度の強化などが挙げられる。また、福岡県でも、ムスリム対応（ハラール認証・お祈り用の部屋や洗い場・キブラの貸し出し）などの受け入れ態勢を整えることが必要である。これらが全て改善していけば、おのずと私の目標は現実的に形になるだろう。

その為に大学生の私が今すぐ出来ることを考えてみたら、たかが知れている。だがしかし、ASEAN諸国の現状をより多くの人に知らせ、そして少しでも関心を持ってもらうこれこそが、私の新たな課題である。そして近い未来、福岡県が今以上に国際的な県になる為の架け橋となる人材になり、更なる国際化に貢献していきたい。

自らの目で世界を見つめ、よりよい世界を目指していく

立石　創太郎
九州大学経済学部2年
Global Wings 2 班

私が本研修への参加を希望した理由は、自分の目で世界のことを確かめ、自分の学んでいることや目標としていることと実際の世界とのつながりを強めたいと考えたためだ。

「将来、国際機関で働き、支援を通して世界中の貧困や飢餓をなくしたい」と長い間考えていたが、実際に自分の目で世界のことを見ることのできる機会は少なく、イメージだけでものを考え語ることに違和感を覚えていた。その中で「福岡県グローバル青年の翼」を見つけ、途上国や東南アジアの実態を知れること、世界の国や人について理解を深めることに期待して参加を希望した。

世界中の人間を理解し、尊重し、支援を行わなければならない国際機関で働きたいと願う私にとって、多民族国家であるミャンマーとマレーシアを訪問できたこの研修の内容はとても有意義だった。

ミャンマー・パコックのオイスカ研修センターで厳しい共同生活を送りながら、農業技術を学ぶ同年代の研修生たちとのディスカッションの中で、ビルマ族、パオ族、シャン族それぞれの部族の文化や言語について誇らしそうに話していた姿や、夕食交歓会で披露された部族の民族衣装や伝統舞踊がとても印象的だった。マレーシアの夕食交流会では、国を構成するマレー系、中華系、インド系、それぞれの学生と交流する中で、民族ごとの文化や信条、これまで受けてきた教育の違いなど多くのことを教えてもらった。また、ハラル産業開発公社を視察した際には、ハラルの習慣や成り立ち、ハラル認証の仕組みについて学んだ。これらを通じて、国の数で言えば２カ国と少ないかもしれないが、国際機関で働くためには、異なる信条や文化、歴史的背景をもつ人々を理解し尊重していく姿勢がいかに重要か、ということを学ぶことができた。

私が見たいと思っていた途上国や東南アジアの貧困と発展についても、ミャンマーの内陸部のバガンやパコックでの暮らしは生活の機能としては貧しいかもしれないが、私の目にそこで暮らす人々は幸せそうに写り、自分のイメージしていた世界とは異なる光景があった。マレーシアのクアラルンプールではそびえ立つ高層ビルや綺麗に整備された幹線道路、Rapid KLと呼ばれる高架鉄道の光景に圧倒され、想像以上に発展した姿に驚かされた。

国際機関で将来働きたいと考える私にとって、自分の目で確かめることの重要性や、学ぶもの・目標とすることの先にどんな世界が広がっていて、どんな人たちがいるのか意識することの大切さを、本研修を通し学べたことはとても価値あるものだった。文化や宗教や歴史や教育などさまざまな観点に目を向け、これからの学びをすすめていきたいと思う。

アジア諸国で感じたポテンシャルとエネルギー

靏久　拓磨
株式会社福岡銀行　天神町支店
Global Wings 2 班

私が今回、この「福岡県グローバル青年の翼」に参加しようと考えた理由は、近年成長が著しいアジア諸国に出向き、私がこれまで体験したことのない海外の文化や価値観に触れて現状を把握することで、自身の視野を広げたいと考えたからである。

今回の海外研修での訪問先であるミャンマー・マレーシアについての知識はほとんど持っておらず、両国ともに「発展途上国」というイメージを抱いていた。しかし、海外訪問前の研修でミャンマーにおいてのオイスカセンターや日本企業の活動内容、そしてマレーシアの経済・政治・宗教・人種や現在の情勢などの講義を受け、両国へ抱いていた発展途上というイメージが変わり、訪問前の予備知識として非常に参考になった。

ミャンマーのパコックで訪問したオイスカ研修センターでは、10代から20代前半の若い研修生たちが農作業や食品加工、そして日本語の授業といった様々な研修を受けていた。彼らは技術も語学も懸命に習得しようと努めており、農業や食品加工の技術を故郷で広めたいという強い想いを持っていた。そんな彼らの想いを手助けするべく、日本人指導者が現地の人々と協力し、生活を共にしており、このような活動こそが国際交流の真の姿だと感じた。

ミャンマーの都心部ヤンゴンの街中では、多くの車が走り、人々の活気溢れる姿を目の当たりにした。インフラ整備がまだまだ遅れており、今後更なる発展の可能性を秘めていると感じた。

一方、マレーシアで訪問したクアラルンプールは都市として著しい発展を遂げており、交通面・商業面でも目を見張るものがあった。政府関係機関や現地企業を訪問し、観光面・交通面・商業面の観点からマレーシアという国に触れることができた。

その中で、マレーシアにおいて現地法人を立ち上げ、飲食店の展開や様々なビジネスを行っている株式会社ROI（現地法人名M&M Arc Sdn Bhd）を訪問させていただき、現地法人責任者の鈴木裕也様から、「マレーシアは生活コストや安全性、言語の面から東南アジアの中でもビジネス展開のしやすさはトップクラスである」という話をお聞きし、今後日本企業・福岡県企業の進出が増えるチャンスはまだまだあると考えた。

今回の海外研修では、訪問先の国々のエネルギーを感じた。今後は日本とアジア諸国との関わりは更に強くなっていくだろう。特に福岡県はアジア諸国に近いという土地柄から、接点は多くなると考える。私は現在、仕事で福岡県内の企業経営者と多く関わっている。今回の研修を通じて感じたこと・考えたことを足がかりとしてアジアとのつながりや見識を深め、今後仕事において出会う福岡県内企業の方々とアジア諸国との間を繋ぐことできるような存在になりたいと強く感じた。

もっと積極的に、もっと貪欲に

十時　直大
タカ食品工業株式会社　東業務グループ
Global Wings 2 班

その地域の特色や文化に触れ、日本とは違ったスタンダードを知ることで自分の視野を広げたいと思い、この事業への応募を決意しました。

この研修を通して、自分が如何に無知であるかを実感させられました。私がこうしている間にもアジアは目まぐるしいスピードで成長をしています。海外研修で訪れたミャンマーのOISCA研修センターの研修生たちはまっすぐな目で将来のことや農業の発展について語ってくれました。一方、マレーシアにおいては多民族国家ならではの問題が多くありました。

特に印象深かったのは、マレーシアで実地に学ぶことができたイスラム教のハラルについてです。食品製造を行っている観点から、海外のフードビジネスについて学ぼうとしましたが、実際、この研修に参加するまではハラルという言葉さえも私は知りませんでした。しかし、グローバル社会といわれる現代において知らないということは許されない問題だと感じています。ムスリムの人口は年々増加し、2030年には世界の27％にもなるといわれています。ハラル産業開発公社のMohamad Romzi Sulaiman氏によれば、イスラム教徒の割合が大きい国においてはハラル認証を得ている食品はありふれていて特に問題はないようですが、海外旅行で訪れる、イスラム教がほとんど普及しておらず、ハラル認証を得た食品がほとんど手に入らない国での食事においてイスラム教徒の人は頭を抱えているとのことでした。

国内での１次研修から、コミュニケーションについても学ぶことが多くありました。郷土の歴史や県内企業の海外展開、訪問国などの様々な講義を聞くことができましたが、講師の皆様が仰っていたのが「恐れるな」「恥ずかしがるな」という点です。空気読みすぎ症候群の日本人は世界にもう少し目を向けたほうがいいのかもしれません。たしかに海外研修においても現地の学生、企業の方々、いろんな方が積極的に話しかけてくれましたし、積極的に話すからこそお互いをよく知ることができるのだと今は確信しています。

最後になりましたが、貴重な講義を頂いた講師の皆様、視察を受け入れて頂いた皆様、本当にありがとうございました。内容も旅程もハードな研修を通して多くのことを学び、意見交換を行うことで、明らかに今までの自分と比較して一回りも二回りも成長出来たと思います。まだまだ知らないことも多く、もっと知りたいと思えるものが増えたことは私にとって貴重な経験でした。

コミュニケーションを活発に行うことでチームが活性化し、パフォーマンス能力も向上することを肌で感じ学ぶことが出来ました。まずはこれらを日常の業務や地域活動など、水平展開できるよう積極的に活動していきたいと思います。

“自分以外の誰かのために”私が感じたこと

原　学哉
添田町役場　地域産業推進課
Global Wings 2 班

私が勤めている添田町は、福岡県南東の山間部で毎年人口が減っており、少子高齢化が進み、外国の方を見かけることはめったにない田舎である。そんな町の職員である私が、国際的視野を持つことに意味があるのかと感じたこともあったが、この研修で180°考えが変わってしまった。今回のグローバルウィング2016に参加するにあたって、少しでも町の為に何か出来る事がないかというテーマをもって参加したが、たくさんの収穫があった。

一番の収穫は、第４次研修（海外研修）の６日目マレーシアクアラルンプールでの夕食交流会である。東南アジアで活躍する福岡にゆかりのある方や、マレーシアの大学生たちと話すことでいろいろなヒントをもらえた。

福岡市出身で、現在はマレーシアのかたとご結婚なさっている女性と、その娘さんと話しているとき、今の海外の若い子たちは、一般的な旅行には飽きてきているという話題になった。都会の大学生で海外旅行に行く子たちは、日本の田舎体験をしたいという声をよく聞くという話をしてくれた。実際周りにいた大学生たちの食いつきもよく、「どんな体験ができるのだ？」、「山はどんな山だ？」と問われ、写真を何枚か見せて興味を持ってもらえた。仲良くなって話を聞いていると、特別なことを体験して、綺麗な写真をSNSにのせたいとのこと。添田町にも活かせるとすごく感じた。

また、ミャンマーのパコック・オイスカ研修センターでの体験も刺激的なものだった。近代的な高層ビル群がある中心都市のヤンゴンと比べると、同じ国とは思えないくらい田舎の地域だが、そこで出会った農業研修を行っている若者たちは、やる気に満ちていて何事にも一生懸命だった。数人の研修生との意見交換、質問のやり取りの中で、家族のために、働く技術を身につけたいと言う研修生たちには胸をうたれた。自分のためではなく誰かのために。行政職員として見習うところだらけだった。

そして、発展していく国というのは、まずはやはり活力のある人材を育てていくことから始まるというのを、まじまじと感じた。

また、国内研修では、郷土の歴史や県内企業の海外展開、訪問国の政治・経済・宗教や日本が行う経済協力や国際貢献活動などについて、色々な講師の方々から講義をいただいたのも勉強になった。しっかりと事前に情報をもっていることで、見え方も違ってくるというのが面白かった。

今回の約半年に渡る「福岡県グローバル青年の翼」に参加して、なにより感じているのが積極性の大事さである。殻に閉じこもるのではなく、どんどん自分から発信していく。一緒に研修を頑張った団員たちも皆積極的で、たくさん刺激をもらえた。

国内研修で講義をいただいた講師の皆様、海外研修の視察先での皆様の話は、これからの私の人生の中で、大きな糧になるものばかりでした。心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

To Infinity and Beyond!

松尾　薫
福岡女学院大学　国際キャリア学部１年
Global Wings 2 班

私にとって「福岡県グローバル青年の翼」の全てが新しく刺激的な経験だった。「知らない世界を見てみたい！体感したい！」という私の考えに、大学の教授が耳を傾けて下さり、この事業への参加を勧めて下さったことが応募のきっかけであった。

国内研修では、たくさんの講師の方の話を聞き、「この研修に参加しなかったら、一生経験しなかったかもしれない」と思う貴重な経験を何度もすることができた。海外研修直前の第3次研修では、海外の訪問先での英語スピーチの原稿作りや、スピーチ指導、結団式などがあり、いよいよ海外研修が始まると感じ身が引き締まった。

ミャンマーとマレーシアを訪れた海外研修では、この文章ではまとめることができないほどたくさんのことを学び、経験した。まず、初めに訪れたミャンマーは、私の曽祖父の戦没池でもあるため、我が家では国の呼び名もイメージも旧国名の「ビルマ」のまま。いざその地に降り立つと、大きな国際空港、水洗トイレを目にして、ここまで発展しているとは思っていなかったのでとても驚いた。しかし、衛生面やインフラ整備の面ではまだまだ課題が多いと感じた。

ミャンマー・パコックのオイスカ研修センターの研修生である現地の青年たちとの交流は本当に刺激的だった。自分のことは二の次、常に家族のことを考えている彼らの目はキラキラ輝いていて、同じ年頃なのになんて素敵なのだろう、と自分が恥ずかしくなった。

そしてミャンマー滞在の最終日に、ヤンゴン郊外にある日本人墓地内に建てられた「福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑」で献花をさせていただいたことは、私にとって誇りあり、戦争とは平和とは何なのか考えさせられた。

マレーシアのクアラルンプールでは、真夜中でも明かりがたくさん点いている高層ビル群に圧倒された。ここで世界を相手に仕事をしている方々の話を聞かせていただき、大きな刺激となった。マレーシア政府観光局を訪れた際、福岡でもよく見かける“タクシーに貼られたマレーシア観光PRの広告”は、実はマレーシア政府観光局のプロジェクトだと知ってとても驚き、マレーシアをより身近に感じることができた。クアラルンプール最後の夜に開催された夕食会では現地の大学生と仲良くなり、再会を約束することができた。

今回の研修を通して、世界にはまだまだ自分の知らないことが無限にあると実感し、発展途上国といわれる国々も無限の可能性を秘めていると感じた。そして、これからの自分の将来がどんな冒険になるのかさらに楽しみになった。まさに、To Infinity and Beyond!

最後になりますが、この研修に参加できたこと、そして出会った全ての方々に心から感謝します。ありがとうございました。

知ることの大切さに気付いた研修

村上　恭子
九州大学　経済学部経済経営学科　２年
Global Wings 2 班

私は今年の春休みに、語学研修のためにフィリピンに留学した。そこでは、超高層ビルや大きなショッピングモールが続々と建設されている一方で、今にも崩れそうな家で貧しい人々が生活しており、経済発展のギャップを強く感じた。開発途上国の現状を目の当たりにして、将来は公的機関に就職し、経済開発の支援に関わる仕事がしたいと漠然と思うようになった。そんな時にこの「福岡県グローバル青年の翼」を知り、将来の夢につながるのではないかと思い、応募することにした。受験時代に持っていた、経済の勉強をして地方創生に関わる仕事がしたいという夢を諦め、夢も目標もない淡々とした大学生活を送っていた自分を変えたいという思いもあった。

研修を通して感じたことは、私は世の中のことを何も知らないということだ。一次研修で中村学園大学教授の占部賢志先生から、「国際派日本人になるためには、まず日本のことを深く知ること」というお話を聞いた。私は日本の歴史も、政治も、文化も何も知らない。自分が生まれ育った国のことなのに、何の興味も持たずに生きてきた自分が恥ずかしくなった。自分の無知さを痛感させられたが、同時に知らなかったことを知ることの楽しさもあらためておぼえた。また、同じ団員と色々な話をすること、とくに社会人の団員から仕事の話を聞くことはとても大きな刺激になった。

海外研修でミャンマーを訪問したとき、道路は整備され、たくさんの車が走っていた。日本や、いわゆる先進国では当たり前の光景だが、ミャンマーに対して、アジア最後のフロンティアという言葉から、まだまだ開発の進んでいない国というイメージを持っていた私にとってはとても驚きだった。確かに村と都市部では差があったが、ヤンゴンの国際空港もとても大きくきれいで、自分が思っているよりもずっと発展していた。

もう一つの訪問先のマレーシアでは、多民族国家というものを肌で感じることができた。5つの民族がいて当たり前、異なる民族が一緒に仕事をしている姿は、日本ではなかなか見られない光景ではないのかと印象に残った。

そして、ミャンマー・オイスカ研修センターの研修生とのディスカッションや、マレーシアで訪れた華人系の小学校、あるいは市内を視察した時、日本では感じることのできない、若者のパワーを感じた。今までしたいことがあっても、「自分には無理だ」と諦めてきた私にとってはとても刺激的で、彼らのパワーを見習って色んなことにチャレンジしようと思えた。

この研修を通して、当初の途上国の経済開発に関わる仕事がしたいという夢は少し変化して、日本をもっといい国にしていきたい、ミャンマーやマレーシアの若者のように、日本の学生も夢をもって生活できるような国にしたいと思うようになった。まだ漠然としているが、まずは自分自身が日本人としての誇りを持った人になれるよう、残りの大学生活を過ごしていきたい。

肌で感じた世界の教育

山之内　玲奈
西南学院大学　人間科学部児童教育学科　2年
Global Wings 2 班

「大学生になったら何かしよう」と意気込んでいたけれど、何をしようか悩んでいたとき、友人に誘われてある学生団体の講座に参加しました。国際教育について討論をしたとき、1年間大学で教育を学んできたはずなのに、何も発言できませんでした。そんな自分が悔しく、自分の無知さを痛感しました。「日本だけでなく世界の教育に触れ、視野の広い教師になりたい」と思い、「福岡県グローバル青年の翼」に応募することに決めました。

第二次研修ではセブンシーズスクールを訪問し、生徒たちの英語力の高さに驚かされました。最新、最先端の英語での教育を目の当たりにし、世界を感じられる教育の魅力を感じました。

7泊8日の第四次研修（海外研修）では、１日１日全てが刺激的で、たくさんのことを学びました。OISCAミャンマー研修センターでは同じ世代の人たちとグループディスカッションをしました。「あなたたちは日本の農業についてどう思う？」と聞かれ「後継者の問題があるから、これからが大変になる。」と答えたら、「その問題をあなたたちはどうするの？」と質問されました。その質問に対して何も答えられず、日本の問題なのに自分には関係ないと他人事のように思っていた自分に気付きました。村の発展の為に真剣に農業を学んでいるOISCAの人の真っ直ぐな目が脳裏から離れません。

マレーシアではクアラルンプールの華人系の小学校を訪問しました。成績順でクラス分けをしており、日本の小学校よりもシビアな競争・教育環境で驚きました。小学生で中国語の他にマレー語、英語を日常会話レベルまで取得するそうです。授業時間も30分と日本より15分も短いなど、日本の教育との違いが多々あり、とても興味がわきました。

この「福岡県グローバル青年の翼」では、大学で専門的に学んでいる教育以外の分野についても講義を受けたり、視察に行ったりと幅広く学びを得ることができました。今回の研修を通して、今まで曖昧であった自分の本当にやりたいこと、明確な夢を見つけることができました。

その夢とは、大学を卒業したら青年海外協力隊として数年活動して、日本に戻り教師として働くことです。ただ知識を伝えるのではなく、自分の言葉で子どもたちに思いを伝えられる教師になれるよう、これから今まで以上に勉学に励みたいと思います。

ミャンマーとマレーシアに刺激を受けて

河野　泰士
九鉄工業株式会社　古賀保線所
Global Wings 3 班

自発的なコミュニケーションを身につけたい、そして英語での会話力を身につけたいという思いから、このプログラムに応募しました。

第1次研修・第3次研修ではアジア・マレーシア・ミャンマーのことについて学び、海外研修で訪れる地域についての見識を深めました。アジアのことについては、世界史の中から日本史を見ること、日本史の中から世界史を見ることが大事であると学びました。また、マレーシアについては歴史・イスラム教・ハラルという日本ではあまり知られていない事柄について学び、ミャンマーについては国の概要や、海外研修でお世話になるオイスカ研修センターとはどういうところなのかを学びました。この時にはミャンマーとマレーシア両国について自分の目で早く見てみたいという思いが非常に強くなっていました。

海外研修では、まずヤンゴンから飛行機で約1時間、そこからバスで約1時間半もかかるパコックのオイスカ研修センターと近隣の村を訪れました。ミャンマーの方と触れ合って感じたことは、みんなが全力であるということでした。オイスカ研修センターの方達はあいさつを元気にしてくれ、また夕食交歓会でもすばらしい催しを披露してくれました。私たち団員をもてなす為に一ヶ月以上も前から毎日歌や踊りの練習をしてくれていたと聞き非常に驚きました。

また、近隣の村では到着早々歌と踊りで出迎えていただき、村人総出の歓迎ムードに興奮したのを覚えています。全力で取り組めば相手は答えてくれると教えられた気がしました。ミャンマーではそのほかにもバガン遺跡群、ヤンゴン郊外の日本人墓地にある福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑を訪れました。バガン遺跡群には数日前に起こった地震の影響が色濃く残っており、熊本地震を経験した日本人として胸が痛みました。福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑では献花を行った後、日本人墓地内を歩き、そこにあった「戦友とこの地に眠る」の文字に心をうたれました。

マレーシアでの視察先の企業の方達は非常に熱く、現在のマレーシアのことや自らの企業のことをじっくりと説明してくれました。その中で自分の職場でも生かせるなと思うことがいくつもあり、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

福岡県グローバル青年の翼に参加して、率直に感じることは自分が人としてひと回りもふた回りも成長できていると言うことです。この経験は、自分の目標を達成する重要なステップになったと改めて思っています。

世界を知る、己を知る

小柳　賢史
西日本鉄道株式会社　鉄道事業本部
Global Wings 3 班

私は社会人になって以来、ずっと福岡で仕事をしている。近年は、駅や商店、観光地でもインバウンドのお客さまが増え、福岡にいても世界というものを感じることが多くなってきた。これからは世界に目を向けなければならない。他国の人々や文化と直にふれあい、グローバルな感性を身につけたい。その思いから「福岡県グローバル青年の翼」に応募した。

参加して、今のアジアの姿だけでなく、日本、そして自分の姿がはじめて見えてきたように思う。これまで私は「グローバル」とは、「海外」だとか「異文化」だとか、日本の“外”についての理解を深めることだと考えていた。しかし、それだけではないことに気付いた。

強く頭に残っている言葉がある。第1次研修でお話をいただいた占部先生の言葉である。国際交流において相手の信頼を得るには、自らの存在の証明が必要である。要は、自分が何者なのか伝えること、自分を語ることが国際交流、コミュニケーションの第一歩なのだそうだ。そのためには、自国について、自らについて知っておかなければならない。しかし、私は全くの無知だった。

第3次研修にかけて多くの講師の方から、ミャンマーやマレーシアを中心とした国々の歴史や文化について教わった。そして、日本もその国々の成り立ちに深く関わっていたことを知った。

海外研修では、さらに学ぶことが多かった。ミャンマーのパコックにあるOISCA研修センターでは、同世代の研修生からこんな質問を受けた。お米に次いで日本で生産量の多い農作物は何か。私は日本で生まれ育ちながら、確信をもって答えることができなかった。

また、ヤンゴン郊外にある、先の大戦での戦没者を祀る日本人墓地、そしてその中に建てられた福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑は、特に印象深いものだった。日本人墓地内の或る慰霊碑の前には、ご遺族のご家族と思われるカラー写真が供えられてあった。平成の代になって建立された碑もあった。遠い過去の遠い異国の地に、今でも思いをはせている方がいらっしゃるという事実をここで初めて知った。そして、その思いを胸に墓地のお世話をしてくださっている現地の方がいる事実もはじめて知った。

今まで海外旅行をしたことはあったものの、こんなにも多くのことを学び、多くの人に出会えたことはなかった。この研修が、私の世界への扉を開いたように思う。ここに導いてくださった方々に本当に感謝したい。これから私は、ここで培った感性をもとに、日本を見つめ、己を見つめ、常に世界を感じながら仕事をしていきたい。そして、日本の魅力をさらに高め、世界との交流を深めることに貢献していきたい。

新たな価値観、出会い、気づき、学び

橘　里佳子
北九州市立大学　外国語学部国際関係学科　1年
Global Wings 3 班

「何か新しいことをやりたい。」大学に入学して間もない頃、そう思っていた矢先に大学の先生に紹介していただいたのが、この「福岡県グローバル青年の翼」でした。私はこのプログラムを知り、社会人や他大学の学生との交流や、様々な視察や研修を通して、コミュニケーション能力や国際社会における広い視野を手に入れたいと思い、応募を決意しました。

第一次研修から勉強になることばかりでした。国内研修では、国際的な視野を持って福岡で活躍されている講師の方々のお話を聞くことで、様々な角度から福岡と海外との関係を考えることができました。それ以外でも、同じ団員である社会人や他大学の学生との議論やワークショップを通して、彼らの発言力や実行力のすごさも実感しました。これらは私にとって、非常に刺激のある貴重な時間でした。

海外研修では、初めて見る建物や景色、初めて耳にする言語や目にする文字、すべてが新鮮で新しく驚くことばかりでした。

ミャンマーでは、オイスカ研修センターや村の小学校を訪問し、たくさんの方々に歓迎していただきました。家族のもとを離れて住み込みで農業を学ぶ研修生たちとの生活や、夕食交歓会、農業体験を通して、何事にも一生懸命な姿勢や充実感に満ち溢れた表情を目の当たりにし、若者達の活気を体感しました。

マレーシアで一番印象に残っているのは、立食形式の夕食交流会です。現地の大学生や社会人、現地で活躍されている日本人の方々などと交流し、日本語や英語を使って、彼らの日常生活や留学経験、学んでいること、興味のあること、将来の夢や目標などについて意見を交換しました。私の知らない世界の広さを感じるのと同時に、伝えたいことを上手く相手に伝えることができない、というもどかしさも感じました。もっと外国語を話せるようになって、世界中の人々と交流したい、世界のことをもっと知りたい、そう強く感じました。

「福岡県グローバル青年の翼」での研修すべてが、私にとって新しい経験でした。もっと知りたい、できるようになりたい、こうしたい、と思うことがたくさんありました。多くの方々のおかげで、普通に大学生活を送る中ではできない経験をさせていただきました。この貴重な経験を生かして、新しいことに挑戦し、もっとたくさんのことを学び、自分の可能性を広げていきたいです。そして、将来福岡県の発展のために、社会に貢献できる人材になりたいです。

百聞は一見に如かず

中村　天音
九州大学経済学部　2年
Global Wings 3 班

私は大学入学以来、“百聞は一見に如かず”という言葉をモットーにしている。大学で所属しているFIWC九州（フレンズ国際ワークキャンプ）というサークル活動の一環で約１ヶ月滞在したフィリピン・レイテ島の山奥の村で、私は現地の同年代の若者の積極的な姿、貧困から抜け出そうとするハングリー精神を目の当たりにして、今の自分に大きな危機感を感じた。同時に、海外にいて日本への愛も再認識することができた。

この経験を通じて私は、「日本の企業が、今よりも更に海外に進出すればそこに新たな雇用が生まれ、ハングリーな彼らの生活水準の向上や国の発展につながる」と考え、将来はそうした雇用を生み出す仕事に就きたいと思うようになった。そのためにも日本のこと、郷土のことをもっと知りたい、そしてまさに発展しようとするミャンマーや既に大きな発展を遂げているマレーシアをこの目で見たいと思い、この「福岡県グローバル青年の翼」に応募した。

国内研修の講義では、福岡に居ながら世界を舞台に活躍されている方々の貴重なお話を聞くことができた。特に、JETROの田中麻理さんからは、現地に関する知識やデータをある程度頭に入れた上で、それが本当に正しいのかを確かめることが大切だと学んだ。私も、自分の目で見て肌で感じることを大事にしようと改めて思った。

海外研修でミャンマーの３都市を訪問したのだが、視察先や宿泊施設では電気もガスも水道も通っていたので、フィリピンのレイテ島の生活に比べれば豊かであると感じた。そして、パコックのオイスカ研修センターの同年代の研修生たちからは、家族や夢などについて片言の日本語で積極的に質問し、必死にメモを取っている姿から、途上国の大きな可能性やハングリー精神を感じることができた。

マレーシアのクアラルンプールでは、現地に進出している日系企業（外食や不動産コンサル、レンタルオフィスなどを手掛ける㈱ROIの現地法人）や伊勢丹KLの中にあるJAPAN STOREを視察した。ここで、日本の丁寧な接客や技術、文化が通用することを再確認するとともに、日系企業の進出により新たな雇用が生まれ、現地の人が活き活きと働いている姿を目にすることができた。

今回の研修を通じて、私の中で日本のモノを使って世界に雇用を創出する仕事がしたいという思いが日に日に強くなった。この夢をかなえるためにはより一層現地を知ること、そして日本を知ることが大切であると改めて感じた。常に現状に満足せず、自分の目で確かめることを大切にしながら、視野を広げ知識を蓄えていきたい。そして近い将来、途上国のハングリー精神旺盛な人々と競い合いながら、一緒に働きたいと強く思っている。

一歩を踏み出すこと　―挑戦と飛躍―

濱口　結衣
西南学院大学　商学部商学科２年
Global Wings 3 班

私は、高校時代に英語科に在籍していて、海外に出るきっかけは何度もあったが勇気が出ずに実現できなかった。大学では商学部に進んだため海外留学や国際交流などを諦めていた。そんなとき、大学の或る先生が、“日本にいるだけでは感じる事のできないその土地の習慣や生活に触れてみることは絶対に大きな経験になるから挑戦しなさい”と背中を押してくれた。後悔しないように積極的に行こうと思い、今回、「福岡県グローバル青年の翼」に応募する一歩を踏み出すことにした。だからこそこの一歩を大事にしたくて、“挑戦”というテーマを持ってこのプログラムに臨むことにした。

大学では会計学を中心に商学や経営学を学んでいる。しかし大学の講義では、書面での一般論しか学べないことが多い。実際のビジネスの現場はどのようなものなのか、学んでいる理論は日本以外の国にも当てはまるのか…自分の中できれいに消化できずにいた。

しかしこのプログラムでは、国内研修で県内企業の海外展開や企業活動、国際貢献活動、海外研修の訪問先であるマレーシアやミャンマーの政治・経済・歴史・文化などについて学んだあとに、海外研修で様々な関係機関、企業、団体などを視察して体感することができた。大学で積み重ねてきた知識にも、国内研修で学んだ知識にもさらに厚みを持たせることができた。特に、外食や不動産、レンタルオフィスなどのビジネスを手掛ける日系企業のマレーシア現地法人M&M Arc Sdn社を視察して伺ったお話は、学んでいるマーケティング戦略の分野とリンクしていた。ビジネスにおいての失敗要因に対しての反省と対策、そしてそれらを加味した新たなビジネスのスタート。話を聞いていくうちに今まで消化できずにいた蟠りがとけて、さらに日本とは異なるビジネス環境での戦略や日本人との好みの違いなど新たな発見もあった。このプログラムで、普段の生活では出会えない専門家や経営者たちと同じ目線で話したり議論したりすることができて、大きな刺激をうけた。

百聞は一見に如かずと言うように、講義だけではなく今回、実際に現地に足を運んで日本と異なる文化や歴史、ビジネスなどを肌で直接感じることができたのはとても貴重な経験であった。学ぶことや吸収することの多いプログラムであったが、次のステップとして今回の経験を生活の中で活かしたいと思っている。今まで言い出せず頭の中で自己解決してしまっていた事柄を相手に話すこと、伝えること、そして意見を交換することにより関心が深まることや自分自身を成長できることを改めて知った。“挑戦”という言葉を胸に刻んだ研修。これからの人生にもこの“挑戦”という気持ちを常に持って臨みたいと思う。

明確なビジョンを持って福岡の発展に貢献したい

平川　祐太
九州大学　法学部4年
Global Wings 3 班

私は国際交流に関心があり、これまで短期留学や旅行で何度か海外を訪れてきた。特に約1か月間滞在したフィリピンでは、アメリカやヨーロッパとは大きく異なる部分があり、改めて日本や海外の国々について考えさせられる機会になった。また、日本語教師のボランティアや、大学で留学生サポーターを務めている関係上、外国人と交流する機会も多い。東南アジア出身の方も多くおり、彼らの国々について理解を深めたいとも考えていた。そのため、「福岡県グローバル青年の翼」はまたとない機会だと思い、応募を決心した。ただの旅行とは異なり、国内での事前・事後研修が充実している点にも魅力を感じた。

海外研修で特に印象に残っているのは、オイスカ研修センターでの研修生との交流、ミャンマーとマレーシアでの夕食交流会である。

オイスカ研修センターの研修生と趣味の話になった際に、「農業や工業」と彼らが答え、その夢を語っていた姿が忘れられない。「映画鑑賞やバスケットボール」と答えた私とは大違いだ。研修生がいかに本気で日々の研修を受けているのかということがひしひしと伝わってきた。マレーシアの夕食交流会で話した学生も同様に自分の目標をはっきり語っていた。私も、彼らの真剣な姿勢から学ばなければならないと思った。

ヤンゴンの最後の夜には、福岡にゆかりのある方々と夕食を共にさせて頂いた。私は、ヤンゴンで法律事務所を立ち上げて活躍されているSAGA法律事務所代表の堤雄史さんと同じテーブルにつかせて頂いたのだが、そのお話しは非常に刺激的だった。私自身も将来、海外と関わる仕事がしたいと考えており、交流会で聴けたお話や熱心に問題解決に取り組まれている姿を参考にしていきたい。また、事前研修での講義等を通じ福岡とアジアの国々のつながりの強さを感じていたが、様々なところで日本や福岡とのつながりがあると再確認できた。

私は来年から福岡県庁の職員として働く予定である。どの部署に配属されても、オイスカの研修生やマレーシアの学生のように、自分が関わる分野に強い想いを抱き明確なビジョンを持って仕事に励みたいと思う。強い想いがあるかどうかでパフォーマンスは大きく変わってくると考える。そして、この研修での経験を活かし、海外から様々なことを学びつつ、福岡とアジアの国々・世界との結びつきをより強固なものにしていきたい。

最後になりますが、研修で貴重な講義を頂いた講師の方々、訪問を受け入れてくださった方々に深く感謝申し上げます。有難うございました。

ミャンマー・マレーシアの人々との出会いが私を変えた

水田　智子
筑後市役所　市民生活部　健康づくり課
Global Wings 3 班

筑後市役所に入庁して９年目、仕事にはやりがいを感じていた。しかし、考えてみると、世界には73億人もいるのに、私の周りにいるのは、職場の仲間、家族、友人、そして４万９千人の市民だけだった。世界を知り、広い視野で物事を考えられるようになりたいと思い、「福岡県グローバル青年の翼」に応募した。

研修を通じて、自分の知らない世界が多くあることに気づかされた。特にミャンマーでの体験は、世界観を変えた。不衛生な水、放置されたゴミ、未舗装の道路、野良犬の徘徊、日本では目にすることのない光景だった。バガン遺跡のパゴダでは、小さな子どもが売り子をしている姿に胸が詰まった。

一方で、ミャンマーのパコックにあるオイスカ研修センターの研修生が農業や日本語を熱心に学び、「勉強して地元のために活躍したい」と誇らしく夢を語る姿と自分の姿を照らし合わせ、恥ずかしくなった。市職員になった当初は「地域のために活躍したい」と思っていたはずだが、最近は目の前の仕事をこなすことに精一杯で、自分の目標や自分の暮らす街・日本の将来のために何かをやりたいという想いを持てていなかった。

マレーシア・クアラルンプールでの夕食交流会では福岡に留学経験のある方や日本にゆかりのある方々と交流を深めた。現地の方は、自国や日本について多様な知識を持っており、海外に来て、自分の知識のなさを痛感した。それ以外にも、クアラルンプール市内の視察で訪れたISETAN等の商業施設には、日本の商品を専門的に販売しているフロアがあり、そこには自分の地域の物も並んでいた。誇らしく思ったと同時に、さらに自分の街や自分の街の物を海外の方に知ってもらいたいという気持ちが強くなった。

「福岡県グローバル青年の翼」は、事前・事後の研修があり、観光目的の旅とは全く違った。その国の歴史や経済、人々の生活を学んだ上で、実際に現地に行くことで、理解が深まった。また、研修を通して様々な方と意見交換ができ、自分の視野を広げることができた。国内研修の講師の方、国内・海外視察先の方、夕食交流会に来ていただいた方、そして一緒に参加した団員等すべての方々のおかげで色々なことが学べ、とても充実した半年間となった。

今後は、アジアに関する見識を深め、自分の目で現実を確認したい。そして、オイスカの研修生のように地域の将来のために、仕事でもプライベートでも様々な活動に取り組みたい。大きな目標としては、世界中の人に福岡県や筑後市のことを知ってもらえるようにがんばっていきたい。

海外で学ぶ“食の大切さ”“日本の素晴らしさ”

安永　麻紀
中村学園大学　栄養科学部栄養科学科　３年
Global Wings 3 班

私は大学で栄養学を勉強していることもあり、海外の食事情に興味がある。今までいくつかの国に行ったことはあったが、福岡から一番近いアジアにはあまり足を運んだことがなく、日本とどんな違いがあるのか学びたいと思いこの「福岡県グローバル青年の翼」に応募した。

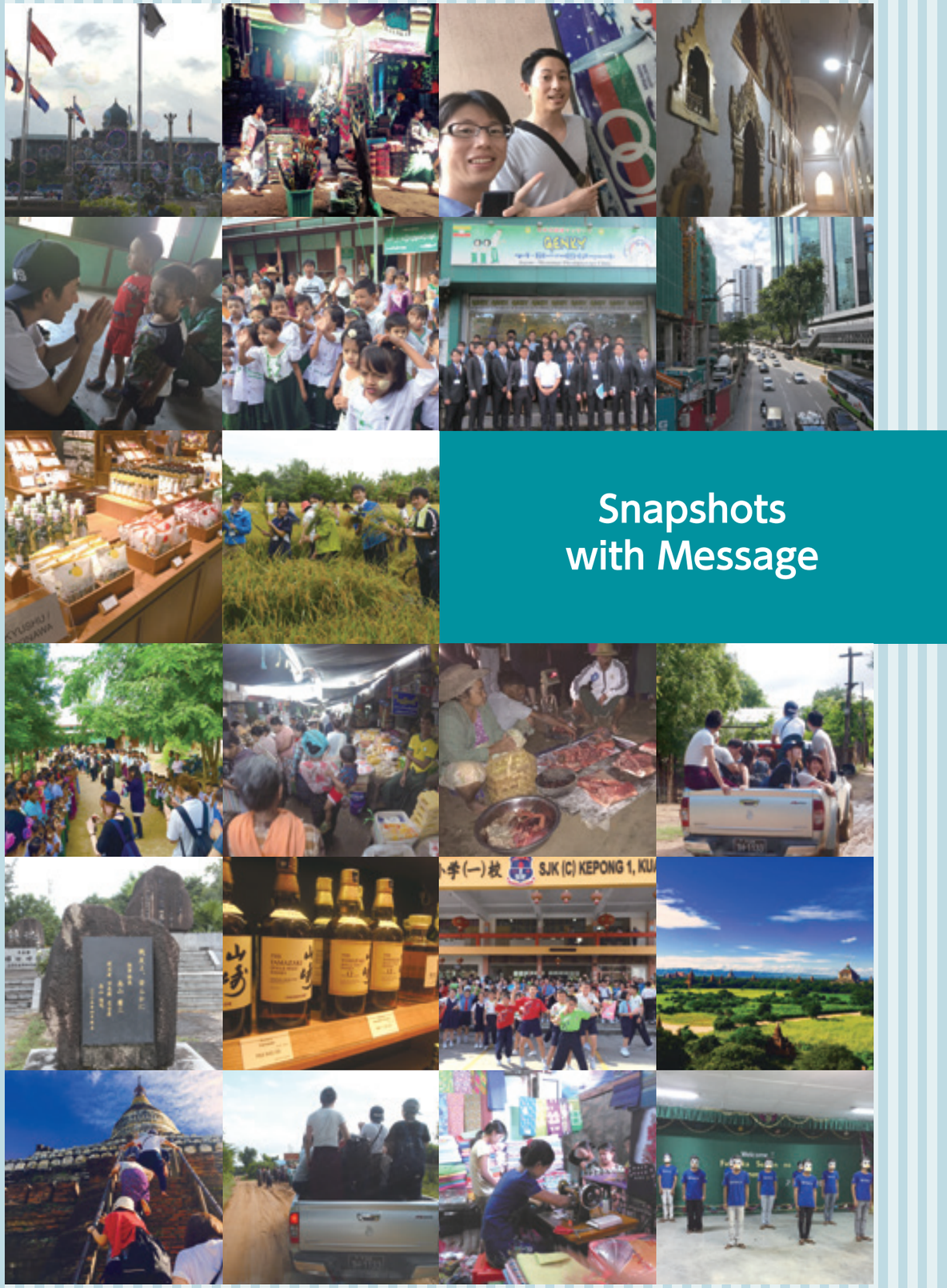
９月に始まった国内研修で、ミャンマー・マレーシアの現状を多方面から考えることのできる数々の講義を聴講する中で、今まで身近に感じたことのなかった宗教に対して興味が止まらなくなり、海外研修への期待を膨らませていた。

海外研修でまず足を踏み入れたミャンマーでは、ヤンゴンとパコックの生活の格差に驚いた。ヤンゴンからパコックに向かうと、整備されていない道、自然に囲まれた村が見受けられ、生まれた国あるいは地域によってなぜここまで違う生活を送っているのか？日本に生まれた私は何ができるのか？を深く考えるきっかけとなった。

また、多くのイスラム教徒がいるマレーシアでハラルに触れた時には、「食の安全性」を求めるのは世界共通であると感じた。宗教上食べられるものに規制がある上でも、おいしく安全な食事を提供するためには、正しい知識に応じた調理工程とそれを証明するハラルマークが必要不可欠である。今後、日本の観光ビジネスを更に活性化させるためにイスラム教徒の方々にも安心して日本に来ていただくためには、日本のハラルに対する取り組みを盛んに行うべきだと感じた。

さらに、ISETANクアラルンプール内にある、今年10月にグランドオープンしたばかりのThe Japan Storeでは、日本の商品がどのような付加価値をつけられて海外で販売されているのかを目で見て学ぶことができた。日本の商品をブランドとして売るためには、一つ一つの商品の裏側にある日本の文化や歴史を知ってもらうことが何よりも大切であると感じた。

この「福岡県グローバル青年の翼」に参加したことで、私は将来自分の専門分野である和食を通じて、日本の良さを様々な国の方に伝える仕事に就きたいと改めて気づくことができた。今後は、さらにいろいろな国に足を運び、訪れた国の現状を理解することでさらに視野を広げ、海外の方、特に宗教上の制限がある方でも安心して日本に来ることができるための食環境を整えたいと思う。そして将来は宗教上の食の規制も含め個々の問題に対応できる「安全で安心な和食」を提供し、福岡の食品産業のグローバル化に貢献できる人材になりたいと思う。



1班 Snapshots with Message

井上愛　Profile p32

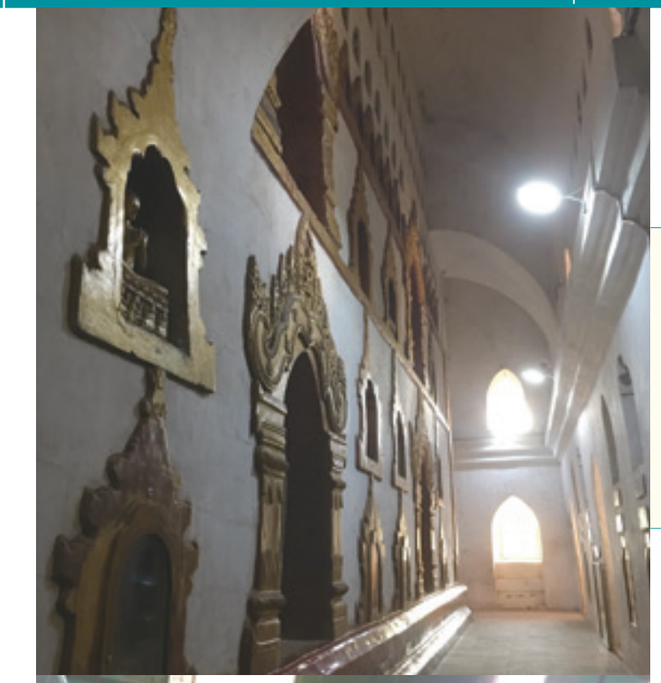
マレーシア首相官邸前にて。いよいよ帰国の途に着こうとする私たちの新しい門出を、空一面に舞い上がるシャボン玉が激励してくれているかのようでした。感謝と名残惜しく離れがたい気持ちに包まれた瞬間でした。

井口由貴　Profile p32

海外研修３日目に訪れた市場の様子。野菜や果物、日用品から衣料品に至るまで様々な商品が並ぶ中、一際私の目を引いたのは色鮮やかな布製品だった。活気溢れるこの街をもう一度訪ねたい。

井本大輔　Profile p33

ミャンマーの街角で出会い、衝撃を受けた100Plus。実はマレーシアの国民的ドリンクでした。海外研修中は幾度となくこのドリンクに元気をもらいました。私のお勧めは、BERI味。絶品です。



窪田まりか　Profile p33

ミャンマー、バガンの遺跡にて。壁一面にさまざまな仏像があり、よく見れば天井付近にまで。すべてが細かいところまで緻密に作られていて、時代や国が違っていても人の感性は変わらないのだと実感しました。

末松大和　Profile p34

ミャンマーのサーレンガオ村での一枚です。初めて会うであろう日本人を前にして戸惑いの表情を浮かべる少年。お互い貴重な国際交流を経験しているなと思いました。

友野葉月　Profile p34

この写真は、ミャンマーの学校訪問の帰り際の写真です。私が、現地の人と目が合うとお互いが笑顔にあり、手を振り合う光景が心温かくなりました。言葉は伝わらなくても、やはり笑顔は世界共通なのだと感じました。

2班 Snapshots with Message

石田佳奈子　Profile p35

私は、ミャンマー（ヤンゴン）での西垣充さんとのお食事会とGENKYの視察が一番印象に残った経験である。
ここで学んだ事は、どれも驚くものであり、自分自身の価値観を変えるものであった。

立石創太郎　Profile p35

クアラルンプールに立ち並ぶ高層ビル。綺麗に整備された道路も鉄道も、マレーシアで見たすべての光景が発展の勢いを物語っていました。この発展の裏に日本が大きく関わったルックイースト政策があったと考えると、日本の凄さも見えてくる…

霜久拓磨　Profile p36

全面改装を行い、10月に開業した「ISETAN The Japan Store Kuala Lumpur」。店内では「メイド・イン・ジャパン」を押し出し、食品・飲食コーナーでは行列ができていた。「九州・沖縄」スペースも設けられており、今後このスペースが拡大されるくらい九州・福岡企業のマレーシアでの認知度が高まればいいなと思う。

十時直大　Profile p36

OISCA研修センターで農業体験をしたときの１枚。普段土に触れる機会のない現代で貴重な体験をすることができた。食の連鎖において、土から離れて生活することは出来ないのだと改めて実感することができた。

原学哉　Profile p37

「ミンガラーバ」「ミンガラーバ」
日本語で「こんにちは」を意味するビルマ語がいたるところから聞こえてくる。
凱旋パレードの様な、子ども大人関係なく大勢での出迎えに、感動しっぱなしだった。

松尾薫　Profile p37

ミャンマーの市場を訪れた時の写真です。店の商品が溢れかえるほど置いてあったり、独特な匂いがしたり。経験したことのない雰囲気と熱気に圧倒されました。これも、ミャンマーの魅力の一つだと感じました。

村上恭子　Profile p38

これはパコックの朝市で、豚肉が売ってある写真です。豚や鶏が目の前でさばかれる様子にとてもびっくりしました。日本では決して見ることの出来ない光景のため、貴重な経験になったと感じました。

山之内玲奈　Profile p38

日本ではできないワクワクした体験。これはミャンマーのある村に行くためにトラックに乗っている写真です。村人が笑顔で手を振ってくれ、トラックに揺られながら温かい気持ちになりました。このあとに待っていた村民全員での盛大な歓迎をこの時の私たちはまだ知らないのです。

3班 Snapshots with Message

河野泰士　Profile p39

福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑での１枚。「戦友よ、安らかに」の言葉に心をうたれた。無謀な作戦に向かっていく日本兵の心の中はどうだったろうか。戦争をしていない今の日本に生まれたことを改めて幸せに思った。

小柳賢史　Profile p39

マレーシアのISETAN The Japan Store に並べられた日本を代表するウイスキー「山崎」。店内には宇多田ヒカルのBGMが流れ、あまおうワインや筑前煮も販売されていた。これらの商品をきっかけに日本や福岡をもっと知ってもらえれば嬉しい

橘里佳子　Profile p40

研修5日目、マレーシアで華人系の小中学校を視察しました。たくさんの先生や生徒たちに温かく迎えていただき、授業を視察しました。生徒たちが積極的に発言し、自ら学ぼうとする姿勢に、日本との違いを感じました。

中村天音　Profile p40

『世界は私が思うよりもずっと広い。』一週間で感じたその思いを象徴する1枚だ。今後も現状に満足することなく、いろんな人との出会いや、自分の価値観が打ち壊されるような体験を自らしにいくような人でありたい。

濱口結衣　Profile p41

バガン遺跡にどんどん登っていく姿。階段が急でもどんな景色が待っているかも知らず夢中で登っていく。そこで待っていたのは青い空と緑の木々の絵に書いたような景色。圧倒された。「すごい」の一言だけで全てを表す景色。この写真のようにみなが上へ上へと目指し、素敵な景色を見ることができる未来をつかみたい。

平川祐太　Profile p41

オイスカ研修センターから近隣の村への道中。道が悪くバスでは通れないため、軽トラックでの移動。道がデコボコで乗っているだけできつかった。ヤンゴンは都会だったが、そこから離れるとまだまだ整備の行き届いていない場所もあることを目の当たりにした。

水田智子　Profile p42

ミャンマーの市場での写真です。民族衣装ロンジーの縫い付けをしてもらいました。色鮮やかな布が山積みにされていて、心が躍りました。ロンジーは民族や職業によって色や柄が違います。どの生地にするか悩みました。

安永麻紀　Profile p42

２日目の夜、ミャンマーのオイスカ研修センターでの交流会で、現地の青年が披露してくれた伝統的な踊りのうちの一つである「ペンギンダンス」。ミャンマーと日本の伝統文化を披露し合い、非常に盛り上がった夜だった。

半年間に渡る研修を無事に終えて

福岡県青少年育成課事務主査
渡辺　伸也

急速に進むグローバル化とそれに反発して広がる排他主義。混沌とする国際情勢に対応するべく、研修内容を一層充実させて「福岡県グローバル青年の翼(2016年)」を実施しました。

前身の事業である「福岡県青年の翼」と「福岡県青年の船」から数えて46年目となる長い歴史を持つ事業ですが、時代とともに少しずつ内容を変えながらも、切磋琢磨しながらキズナを深めていく若者の姿は今も昔も変わらないものがあり、時代とともに変えるべきものは変え、残すべきものは残し、そして伝えるべきものは伝えていくことが大事だと改めて気づかされました。

華人企業家のRemen Goh氏(向かって左)と

この歴史ある事業に、今年度は22名の青年が挑んでくれました。約半年間に渡る研修を通じてキズナを深め、様々な経験を積み、それぞれの立場で大きく活躍しようとしています。

彼らのために、国内・海外の研修で貴重な講義を頂いた講師のみなさま、フィールドワークにご協力を頂きましたみなさま、視察を快く引き受けて頂いたみなさま、交流会に足をお運び頂いたみなさま、そしてこの事業を様々な形でご支援を頂きましたみなさま、本当に有難うございました。心より御礼申し上げます。みなさまの情熱、次世代へのエール、熱い想いは、22名の若者に十分に伝わっておりますので、是非今後の彼らを温かく見守って頂ければと願っております。

そして、22名の団員のみなさん、過酷なスケジュールによく耐えて頑張ってくれました。国内宿泊研修では早朝から夕方まで隙間なく講義とグループワークが組み込まれ、海外研修では連日朝の4時・5時・6時に起きて夜遅くまで視察や交流会が詰め込まれるという、超過密なスケジュール。国際的な視野を身に付けたい！アジアの現実を体感したい！というみなさんのやる気と熱意に応えるべく、こうしたスケジュールを組ませてもらいました。

福岡からバンコクを経由してヤンゴンに飛び、更にバガンへ飛んで、そこからバスに乗り換えてやっとたどり着くミャンマーの内陸部。そこに、現地の青年たちが厳しい共同生活を送りながら日本の農業技術を学び、祖国に貢献しようと努力している事実。

日本人起業家が、ミャンマーの視覚障害者の社会的立場の低さに憤りを感じて、彼らの自立支援のために日本式マッサージ店を運営している事実。

先の大戦で16万人もの日本人が命を落としたといわれる国ミャンマー。その中心都市ヤンゴン郊外の「福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑」を、現地の方が毎日清潔に管理してくださっている事実。

マレーシアの首都クアラルンプールで、幼少期から多言語で教育される逞しい子どもたち、したたかにハラル・ビジネスのグローバル拠点化を進めるマレーシア政府、世界中から観光客を誘致するために緻密に実行されているプロモーション、そして徒手空拳から身を起こして成功をおさめながら、奢ることなく更なる情熱を燃やす華人実業家の存在。

こうした圧倒的な事実から、みなさんは国際社会の二面性を認識したと思います。それは、国際貢献・ヒューマニズムの側面と、自己の利益を追求する経済競争の側面です。“国際的な視野を身に付ける”とは、この両面を理解して実行することにほかなりません。

国際社会に目を開いたみなさんには厳しい道が待っています。甘いヒューマニズムだけでは太刀打ちできない現実が待っています。是非、くじけることなく、利益を求めることを恐れることなく立ち向かっていってください。

最後に、関係者のみなさま、この意義深い事業を担当する機会を与えていただいたことに心から感謝しております。折に触れて必ず良いご縁をいただくことができ、常々、多くの方に見守っていただいている不思議な“何か”を感じながら無事に研修を終えることができました。

海外研修で訪れたミャンマーとマレーシア、ともすれば埋もれがちになる両国と日本とのキズナを語り継ぎ伝えていく一人になりたいと思っております。両国で、日本で、そのキズナを大切に守っておられる方々に深く敬意を表しますとともに、先の大戦で亡くなられた全ての戦没者のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

福岡県グローバル青年の翼(2016)　グローバル＆ローカル・リーダーシップ・プログラム

募　集　要　項

1．目　　的

県内青年に、世界(アジア)を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

2．主　　催

福岡県グローバル青年の翼実行委員会(以下「実行委員会」という。)

3．事業内容

(1)募集人員　２４名

(2)全体の研修スケジュール

① **第1次研修(宿泊)**…９月３日(土)　～４日(日)
郷土の歴史・県内企業の海外展開・国際協力活動・県の施策等についての講義等

② **第2次研修(フィールドワーク)**…①と③の間の任意の日
海外訪問先に関連する県内企業・団体等の視察

③ **第3次研修(宿泊)**…１０月１５日(土)　～１６日(日)
訪問国及び訪問先に関する講義・海外視察先選定・英語スピーチ指導等

④ **第4次研修(海外研修)**…１１月６日(日)～１３日(日)
現地企業や産業インフラ、NPO法人、多民族融和(ムスリム政策)・文化施設の視察・体験、現地で活躍する日本人などとの交流等

⑤ **第5次研修(宿泊)**…１２月３日(土)　～４日(日)
海外研修レビュー・NPO法人活動講義・事後フィールドワーク企画等

⑥ **第6次研修(フィールドワーク)**…⑤と⑦の間の任意の日
海外研修を受けての県内実践活動

⑦ **報告会**…３月中のいずれかの日曜日
研修成果報告会
※研修日程については、研修効果を高めるため変更になる場合があります。

(3)海外研修

日時　平成２８年１１月６日(日)　～１３日(日)　７泊８日
訪問先　マレーシア(クアラルンプール)、ミャンマー(ヤンゴン・バガン・パコック)
※訪問国(都市)は、変更になる場合があります。

※ 海外研修の内容について

①目　的

産業・ビジネス・文化・社会貢献活動等の分野で、発展し続けるアジアの現状を体感するとともに、福岡(日本)が海外に打って出る姿を学ぶことにより、国際的視野を身につけ異文化交流について理解を深める。

②研修内容

・現地企業や産業インフラ、企業、多民族融和(ムスリム政策)・文化施設、社会貢献活動視察、現地で活躍する方との交流会等
例：都市計画・インフラ・工業施設・現地企業の視察・訪問、多民族融和(ムスリム政策)・文化施設等の視察、日本や現地NPOの社会貢献活動の視察・体験、夕食交流会の開催

4．募　　集

(1)**募集人員**　２４名
(2)**募集締切**　平成２８年6月３０日(木)
(3)**応募資格**(①～④のすべてに該当する者)

① 県内居住者で、平成２８年４月１日現在、満１８歳～３０歳の者
(昭和６０年４月２日～平成１０年４月１日生まれの者)

② 企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核となって活躍する人材を目指す者

③ 過去２年間(平成２６年度以降)のうちに国・地方公共団体等の公的経費(一部助成を含む)によって海外派遣事業に参加した経験のある者、国又は地方公共団体の議会の議員の職にある者は除く。

④ 健康状態等
・健康で協調性に富み、研修計画に従い海外研修等の活動が支障なくできるとともに、規律ある団体生活に耐えられる者
・第１次研修から報告会までの全てのプログラムに参加できる者

5．応募方法

下記の書類をとりそろえ、６月３０日(木)までに実行委員会事務局へ直接申し込むものとする。郵送可(当日消印有効)

① **参加申込書**･･･様式１
② **返信用封筒**(定形郵便のサイズで、住所、氏名を明記の上８２円切手を貼付)
③ **推薦書**･･･様式２
(参加者の所属する団体内の関係者による推薦とする。ただし、参加者の親族や友人による推薦は認めない。)
④ **勤務先所属長の承諾書(ただし被雇用者のみ)**･･･様式３
⑤ **作文**
この研修で何を学びたいか、研修後、成果をどのように活かしたいか等を具体的に記述すること。
・パソコン、ワープロを使用し、1,200字程度にまとめること
・縦A４判横書きとし、タイトル及び氏名を明記すること(タイトルは自由)
⑥ **保護者の同意書(ただし４月１日現在で２０歳未満の者のみ)**
･･･様式４

※上記データは、福岡県庁ウェブサイトよりダウンロード可能です。
「福岡県グローバル青年の翼」にて検索ください。

6．団員候補者の選考、決定

(1)団員候補者の選考

実行委員会において、第１次選考(書類選考)を行い、結果を７月上旬までに本人に通知する。
書類選考の合格者については、７月１０日(日)（予定）に第２次選考(面接)を実施し、８月中旬までに内定者を決定し本人に通知する。

(2)団員の決定

団員の決定は、第３次研修まですべて出席し、かつ団員としてふさわしいと認められる者について第３次研修終了時に行う。
※不適当と思われる者については、それ以後の研修参加を認めない。

7．経費・損害等の負担

(1)次に掲げる経費については個人負担とする。

負 担 金	その他の個人負担経費
社会人 120,000円	県内研修に係る経費(交通費、食事代、宿泊費)、パスポート取得に係る費用、旅行傷害保険料、海外研修に係る経費(県内旅費、一部の食事代・交通費等)
学生 100,000円	

(2)負担金は、10月15～16日実施予定の第３次研修前までに納入するものとし、原則として返金しない。なお、負担金納入後、団員が自己の都合により辞退した場合に生じる旅行代金のキャンセル料については、本人が全額を負担し、主催者は負担しないものとする。

(3)研修中の災害、病気、事故、個人の不注意等で主催者の責めに帰さない理由によって生ずる団員の損害等については、主催者は責任を負わないものとする。

8．団員資格の取消し

(1)団員として不適当と認められる者(研修の無断欠席、悪意を持って研修活動を妨害する者など)については、団員資格を取り消すものとする。また、海外研修中における資格の取り消しは団長が行い、速やかに帰国させるものとする。
(2)海外研修中に団員の資格を取り消した場合における帰国に要する経費は、取り消された者の負担とする。
(3)上記二項のいずれかに該当した場合、すでに実行委員会が負担した経費の一部または全部を取り消された者から返還させることができる。

9．事後活動

当事業に参加した団員は、これまでの事業参加者で組織している「福岡県青年の会」に入会し、積極的に地域活動を行っていただくこととする。

問い合わせ先
福岡県グローバル青年の翼実行委員会事務局
〒812-8577　福岡市博多区東公園７番７号
福岡県私学振興・青少年育成局　青少年育成課内　電話 092-643-3387

SPECIAL THANKS TO

国内研修の講義・視察などでお世話になった皆様

田中　麻里　様　日本貿易振興機構（JETRO）　アジア大洋州課
占部　賢志　様　中村学園大学　教授
神田橋幸治　様　ビジネスデザインラボ　代表
田中　克明　様　田中藍株式会社　常務
本松　　洋　様　オーケー食品工業株式会社　海外営業室室長兼営業企画部課長
岩部耕一郎　様　有限会社鵜ノ池製茶工場　専務
藤波　清孝　様　一般社団法人九州観光推進機構（KTPO）　海外誘致推進部　次長
古賀　順子　様　一般社団法人九州観光推進機構（KTPO）　海外誘致推進部　主任
松原　大輔　様　ホテルニューオータニ博多　宿泊料飲本部　本部長
中野　沙織　様　ホテルニューオータニ博多　マネージメントサービス部企画プロモーション課
清水　聰子　様　Seven Seas International School　School 長
秦　　輝彦　様　Seven Seas International School　マネージャー
彦坂　延良　様　公益財団法人オイスカ西日本研修センター　研修課長
長根　寿陽　様　株式会社メディカルグリーン　開発室室長
篠崎　香織　様　北九州市立大学　准教授
Aldo Bloise 様　IT & IP Strategy Advisory　Deputy General Manager
Joelle Bloise 様　IT & IP Strategy Advisory　General Manager
水谷みずほ　様　合同会社みずトランスコーポレーション　代表取締役　社長
花野　博昭　様　合同会社みずトランスコーポレーション　代表取締役　副社長
たいら由以子 様　NPO法人循環生活研究所　理事長
馬場周一郎　様　ジャーナリスト　元西日本新聞記者
山口　　洋　様　アトモスダイニング株式会社　代表取締役社長
田中　麻美　様　添田町ミニバスケットボールチーム「ハッピーパワーズ」　代表
入江　禀三　様　博多ガイドの会
佐藤　豊子　様　博多ガイドの会
Issak Amagasa 様　福岡マスジドアンヌールイスラム文化センター
Nureddin Saadi 様　福岡マスジドアンヌールイスラム文化センター
辻　　史郎　様　株式会社辻利茶舗　代表取締役

海外研修の視察・交流会などでお世話になった皆様

木附　文化　様　オイスカ研修センター（DOA OISCA Intarnational）　Country Director
オイスカ研修センターのみなさま
西垣　　充　様　ジェイサットコンサルティング　代表
GENKYで働くマッサージ師のみなさま
渡邊　桂三　様　ヤンゴン市水供給・衛生アドバイザー　福岡市水道局
堤　　雄史　様　SAGA国際法律事務所　代表弁護士
許　　惜惜　様　Kepon SJK（C）　校長
Kepon SJK（C）学校のみなさま
Yusnita Yusof 様　Malaysia Tourism Promotion Board（マレーシア政府観光局）　Senior Director
マレーシア政府観光局のみなさま
Mohamad Romzi Sulaiman 様　Halal Industry Development Corporation（ハラル産業開発公社）　Senior Manager
ハラル産業開発公社のみなさま
Aisha Amir 様　SPAD（陸上公共交通委員会）　Manager
陸上公共交通委員会のみなさま
馬場　啓爾　様　JETROクアラルンプール　次長
HJ.RASOL ABU BAKAR 様　JETROクアラルンプール　DIRECTOR
JETROクアラルンプールのみなさま
REMEN GOH 様　RG Fibre Industries Sdn Bhd　Managing Director
鈴木　裕也　様　M&M Arc Sdn.Bhd.　General Manager
兼松幸一郎　様　在マレーシア日本国大使館　二等書記官
藤木　雅聰　様　在マレーシア福岡県人会　会長
在マレーシア福岡県人会のみなさま
クアラルンプールの夕食交流会にご参加いただいたみなさま

そして、この福岡県グローバル青年の翼（2016）
グローバル&ローカル・リーダーシップ・プログラムに
ご協力を頂きましたすべてのみなさま

団員一同、心から、熱く厚く御礼申し上げます。